

長春真人の旅

The Travels of Changchun zhenren

2017年12月5日初版
2019年10月16日第三改訂

安田公男

URL : chinggis-ff.jp

目次

序章 研究の目的と方法	2 頁
第1章 出発からチンカイ城	4 頁
第2章 チンカイ城から大石林牙	19 頁
第3章 チンギス・カンに会う	30 頁
第4章 シル河の行在	40 頁
第5章 帰国	47 頁
終章	54 頁
参考文献など	55 頁

序章 研究の目的と方法

1. 目的

道教の指導者であった長春真人こと丘処機は、西域征服途上にあったチンギス・カンに招かれて、73歳の身を押して西域に向かった。現在の中国北部、モンゴルそしてカザフスタンなどの中央アジア諸国を経て一年がかりで現地に着き、大征服者と会談し講義を行った。往復三年の旅の様子は弟子の李志常が記録し、「長春真人西遊記」として残る。これは当時のモンゴル軍の様子や占領後間もない西域の実情に加えて、通過した国々の地理や文化を知ることのできる貴重な史料として知られている。旅の経路を知るとは、これより二十年前に行われたチンギス・カンの部族統一戦争の転戦過程を知る上でも重要であるが、どのような経路であったのかは、二人が会談した場所を含めて不明な点が多い。このノートでは真人の旅の経路を明確にしていく。

2. 従来の研究

従来の経路図は、管見によれば、日本の資料では岩村忍訳「長春真人西遊記」(1)の付図と、白石典之編「チンギス・カンとその時代」(2)の付図の2つだけである。両図には経路の差があるし図が非常に簡単で説明がなく、一行がどの地点に立ち寄ったのかよく分からない。もう少し精細な図を求めていると、中国のネットサイトでも異なる2種の図を見出した。しかし図が不明瞭な上、経路を決める根拠もあいまいである。Arthur Waley による英訳本「The travels of an alchemist」(3)にも経路図があるが非常に簡単で、訳者自身も深く検討したものではないと述べている。中国、欧米、日本における研究の大部分は、戦前から戦後間もなくに行われており、最近の研究結果を十分に反映した報告はまだないようである。

3. 方法

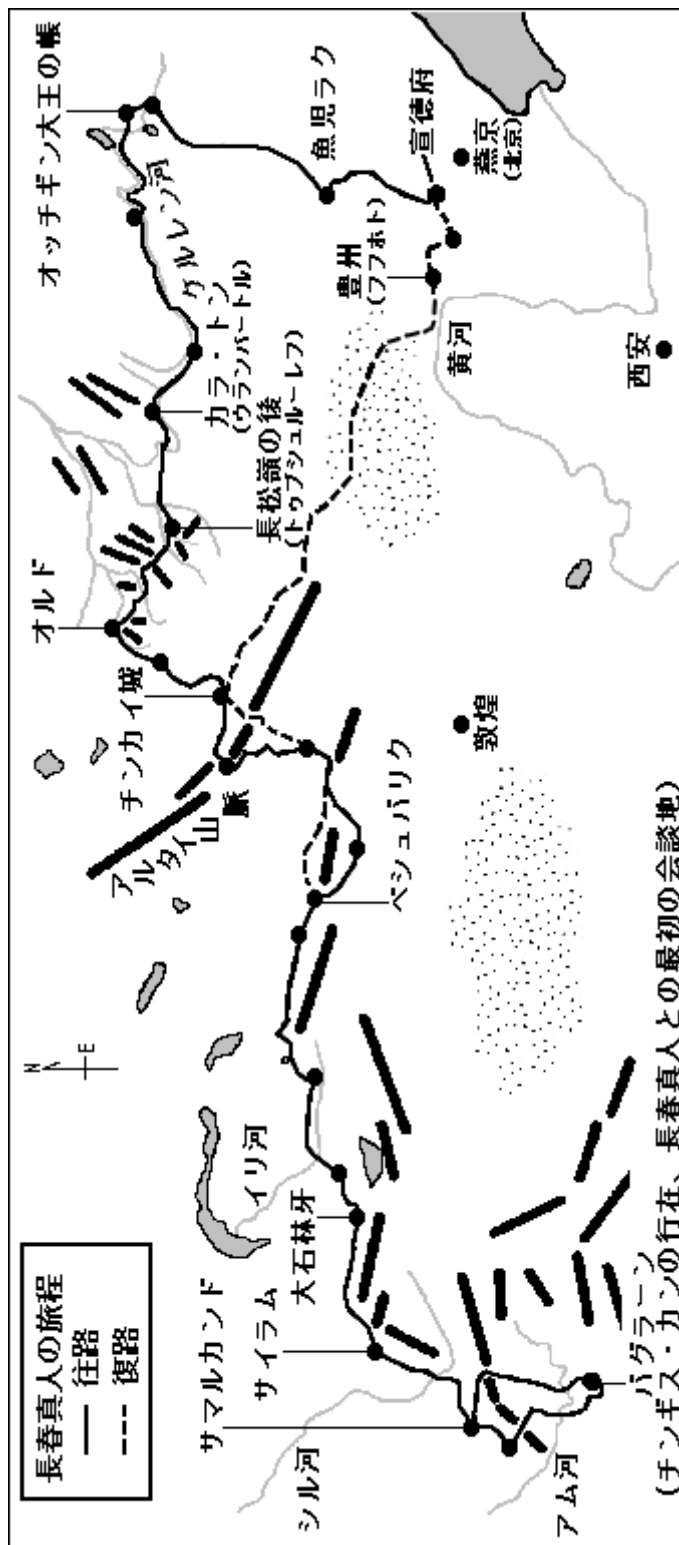
研究が進んでいなかった理由として、1980年頃までは中国が、そして1990年までモンゴルが自由化されておらず、種々の情報が不足していたことがあると考えられる。しかし、近年モンゴル国内での考古学的探索が継続的に行われてきて、真人一行が立ち寄った地点のいくつかが明らかになっている。また、インターネット環境の発達で、中国やモンゴル内陸部の地理情報を得ることが容易になった。これらの情報を元に、岩村本と漢原文を参考にしながら、立ち寄った地点がどこであったのかを順次確認して行く。地点と光景の確認、距離測定にはGoogle Map (GMapと略)を活用し、前地点からの移動距離を求めて、本文の日付や日数から、移動速度が適切あるのか否かを検証の尺度とした。月日は原文のまま陰暦によったので、日数計算には月の大小を考慮にいれなければいけない。しかし、当時の暦の実態が良く分からなかったため、一律30日とした。従って、月をまたがった日数計算では1日多く見積もる事があるのをお断りしておく。

4. 資料

この研究には、GMapの他にも、中国内部の地理情報などをネットより多数得たが、容易に入手できるので一つ一つ記さなかった。モンゴルの地名の英語表記方法は、用いた資料によって異なっているが、原資料のまま用いた。

5. 旅程絵図

今回の研究で明らかになった図を先に示す。次にその根拠を述べる。

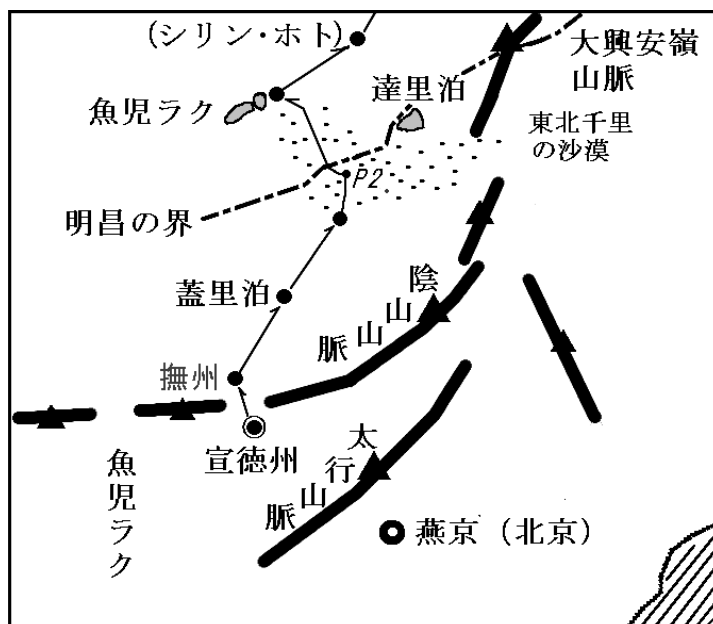


第1章 出発からチンカイ城まで

1. 1 出発→蓋里泊

- A. 長春真人一行はチンギス・カンの招請を受けて、1221年の旧暦2月8日、宣徳州を出発し西域に向かった。弟子18人の他、道案内人の劉仲録とモンゴル人案内人4名が同行した。当地に残る弟子の一人は泣きながら馬の口を留めて、「いつ帰られるのですか」と真人に問うた。真人とても確信はなかったが、「三年で帰る」と繰り返し告げた。10日、翠峴口に宿し、翌日野狐嶺を進んだ。散乱していた白骨^注)を見て、弟子の一人は、「帰り道で拾い祭ろう」と言った。
- B. 北に進んで撫州を過ぎ、15日には東北に向かって蓋里泊を過ぎた。その付近の地上を覆うように噴き出ているものは塩であった。初めて二十戸ほどの人家を見た。南には塩池が連なって東北に伸びていた。これより河は無く井戸で水を得ている。南北数千里に渡り大山もない。

図1 出発から魚児瀧



宣徳州

出発地は現在の河北省張家口市の宣化区で、北京の北西 160km に位置する。漢人の農耕世界から遊牧世界への入り口とも言えるべき町であり、モンゴル語でもカルガンと言う名があり門を意味していた。万里の長城に入る大境門があったからである。一行は漢人なので騎馬が達者とは思えず牛車に乗っているだろう。真人は馬に乗っているようだが 73 歳の老齢であるので初めだけではなかろうか。現在の市の中心を通り北西に進むと道が急に狭まり山並みが迫ってくる。その辺りが翠峴（屏）口である。ここから北に向かうとモンゴル高原に出る峠道になる。宿泊した地点が分からないが、膳房堡郷（40.96N114.73E）が名前からして宿場なので、ここに宿したとする。宣化区中心部から約 60km の距離を 3 日で来ているので 20km/日(d)の移動速度となる。

野狐嶺

翌 11 日、北に峠道を登ると達する。散乱していた白骨は、十年前に金軍がここでモンゴル軍に大敗した時のものである、宿泊した地点はまだ撫州、即ち現在の張家口市張北県に達していない。県中心の 5km ほど手前にある野狐嶺要塞軍事旅遊区の地点 41.11N114.72E だったとすると、前日から約 18km の移動になる。張家口市の海拔 700m に対し張北県は 1400m と、高度が 700m も上がるので速度が落ちているのかも知れない。

蓋里泊

中国のネットサイトによれば、内蒙古自治区太仆寺旗の南巴彦査干淖尔（南バインチャガン・ノール）と哈夏図淖尔（ハシャト・ノール）とある。ノールは湖の意で、即ち泊。これらは現在の国道の南にあるので、B.の塩池はこれらの事であろう。他にも国道近くに九連城湖や烏蘭（ウラン）湖など、湖が多くある。意味からして、蓋里泊は特定の湖の名というより総称であろう。現在の街道沿いに進んで烏蘭淖尔を過ぎると太仆寺旗の町がある。太仆寺（タイプス）はモンゴル語の塩（Dabs）からきた名である。2 月 15 日に到着したのはことと推定する。野狐嶺から 105km ほどである。野狐嶺出発を 12 日とすると 4 日掛かっているので、速度は 26km/日となる。ここから馬に乗り換える。山道で牛車に適さないようである。

1. 2 蓋里泊から魚児灤

- C. 馬で行くこと五日で明昌の界を出た。地には樹木なくただ枯草のみ。砂丘が重なり山を隠す。
- D. また行くこと六、七日、たちまち大砂漠に入った。樹木と言えは小さな榆の木だけで、大きなものでも抱えられほどである。東北に千里の所まで木が生えていない。
- E. 3 月 1 日魚児灤に至り、初めて人家村落を見た。村人は農耕と漁獵を業としている。時は既に三月のはじめであり、春の気配は広がっているが氷はまだ溶けない。3 月 5 日魚児灤から東北に進んだ。四方にははるかに人煙があつたが、それはみな黒い車と白い天幕であつて、水草に従い放牧していた。辺り一面は平らな湿地で、小さい木さえない。周りに見えるのは黄色い雲と白い草のみである。

経路概観

太仆寺旗出発を 2/16 とすれば、3/1 着であるから 16 日間の旅である。ところが、明昌の界までの 5 日と、魚児灤までの 7 日を足しても 12 日にしかならず、4 日不足する。どこかに記録の漏れがある。

明昌の界

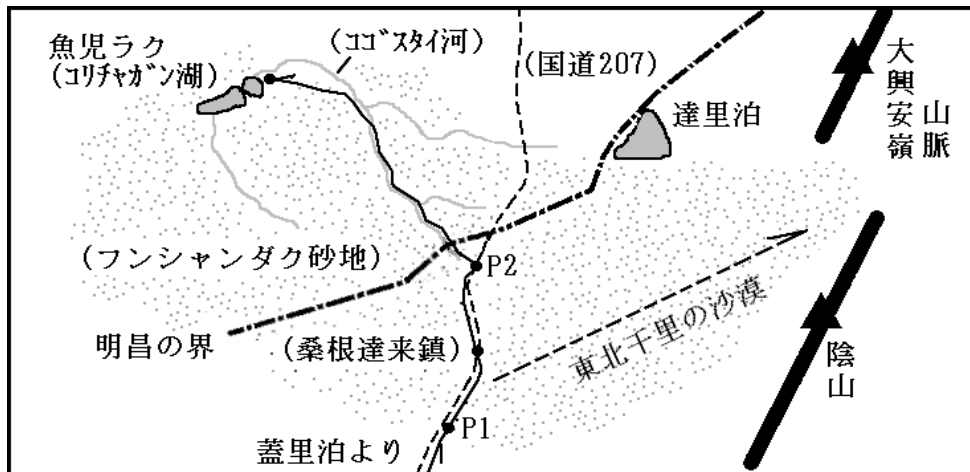
金国は騎馬民族の攻撃を防ぐために、堀と土塼を組み合わせた界壕と呼ばれる防衛施設を何千 km にも渡って国境線に張り巡らせた。その明昌年間（西暦 1190－1196 年）に作った部分である。北東から達里湖の西に沿って伸びてきて、湖を少し過ぎた地点からほぼ西南西に砂丘地帯を走っていた。遺構は達里湖の西 43.29N116.54E 辺りに明瞭である。北に向かう国道 207 を遮る辺りは、43.06N116.252E－42.65N114.91E の間に伸びている。

東北千里の砂漠

明昌の界付近に広がる沙漠を渾善達克（フンシャンダク）砂地と言う。太仆寺旗から国道 207 と省道 27 沿いに進み、東北に砂漠が広がるという表現にふさわしい地点は、沙漠の入り口である P1、42.45N115.83E 付近か、完全に沙漠環境になった桑根達来鎮かである。千

里を唐里とすれば 570km になるが、実際は 130km 程度である。千里は実距離というより、単に遠くまでという意味だろう。他書でもそう言う例があるし、B.の数千里も同じと思われる。記述の順序に従い、北に向かう国道 207 と明昌の界の接点あたりから沙漠を見るとほとんど東方向である。実際の地形からすると、C.と D.が前後入れ変わっているように思える。

図2 東北千里の沙漠と魚児瀾



魚児瀾（ギョジラク）

現在の定説は達里諾爾（達里泊、ダライ・ノール）である。しかし、湖の南部から行くとしたら水の乏しい道で行きにくい。しかも、達里泊の湖畔近くには村落が少ない上に、街道から外れていて取りつきが悪い。付近で唯一大きな町である達来諾日鎮（ダライ・ノール鎮）で農業は行われているようだが、湖畔から東に 20km も離れていて、漁業が生活の一部であるとは考えにくい。このように、地理的な理解が困難である。ところが、最近の白石の説(4)によれば、魚児瀾はコリチャガン湖（呼日查干淖尔）である。現在は 2 つに別れた湖の西湖が干上がりかけているが、当時は西湖も水が豊富で大きな集落が湖の東北部にあった。43.4803N115.0887E 地点に見える遺跡のようである。そこに向かう経路を見て見ると、現在でも湖や川が多く道中の水に困らない。集落は湖に近接しており漁業が生活の一部であることを一行は実見できるし、農耕が行われていた跡も見える。周囲の通行痕も明白である。このように達里泊を魚児瀾とした場合の問題が解消されるので、筆者もこの説が正しいと考える。

魚児瀾に至る道

どの経路で進んだかであるが、コゴスタイ河（高格斯台郭勒）の本流沿いに進む道が明瞭でありもともと水に恵まれている。国道 207 の 42.95N115.94E に西に向かう分岐点 P2 があり、そこから河沿いに進んだものと思われる。明昌の界を越えるのは、42.97N115.86E あたりと推定する。河沿いの道はうねっており分かりにくい、明昌の界を越えた地点より魚児瀾まで約 100km ある。数日進んでから河を離れ、東から集落に向かったのだろう。コゴスタイ河は東北から湖に流れ入り、周りは湿地になっているので、ここを出発した時は河の北岸を進んだであろう。E.の描写は土地の状況に一致する。

太仆寺旗からの移動距離と速度

太仆寺旗から魚児瀾までの総距離は約 265km あり、日数 16 日なので平均速度 17km/d となる。この速度で行くと、P1 までは 85km あるので 5 日掛かるだろう。そこから P2 を経て明昌の界を 10km ほど過ぎるまで 80km あるから、4.7 日となって C.の 5 日に合致する。そこから魚児瀾まで 95km なので 6 日かかり日数合計は 16 日となる。このように一応の理解

はできるが、C.の六、七日の行程がどこになるのかよく分からない。太仆寺旗から桑根達来鎮までのこととすると 110km なので 6.5 日となり説明はつくが、P1 から桑根達来鎮までの行程が重複する。記事の前後に加えて脱落もあるようだ。又、騎馬での速度 17km/d は牛車よりも遅い。一行は漢人なので初めての騎馬による長期間の旅に慣れていなのだろう。そのせいで記録も混乱しているように思われる。

1. 3 魚児灤→ケルレン河

- F. 途を変えずに行くと二十余日で砂漠に一条の川を見た。ケルレン河に流れ込んでいる。
- G. 川を渡って北に 3 日進んで小砂漠に入った。4 月 1 日オッチギン大王の帳に着いた。氷が溶け始めた。7 日大王に謁見した。
- H. 17 日に大王より牛馬百余頭と車十台を贈られて出発した。西北に進んで 5 日でケルレン河に着いた。そこは河水が溜まって周囲数百里の湖水をなしていた。
- I. 河の南岸に沿って西に進んだ。5 月 1 日、川の南岸にいる時に日食を見た。ここで水流は東北に向かう。

図 3 魚児灤から河が東北に流れる地点



国境を越える無数の通行痕

46.36N117.24E



砂漠の一条の川

途を変えずに行くと F.にあるのは、おおむね北の方向に伸びる明瞭な道があり、それを進んだ、ということだろう。方向と経過日数から考えると、一条の川とは、興安嶺山脈から流れてブイル湖に流れ入るハルハ川であろう。川に達したとか出たではなく、川を見た、と書かれているのは、高台になっているモンゴル側に到着したからこそ書ける描写である。川は主にブイル湖に入り、ウルシュン川を通じてフルン湖（モンゴル側はダライ・ノール）、即ちケルレン河の終着点に流れ入る。しかし、一部は直接ウルシュン川に流入しているので本文の表現は間違っていない。GMap で見ると、川の近くにあつて、南からの目標になる集落といえばモンゴルのハルフ・ゴル (Khalkh gol) しかない。南や西からの道が集まっており、

川を北に渡ると中国の内モンゴル自治区である。取りあえず到着点をそこと仮定し、この後の経路が合理的に解釈できればそれが正しかったとする。

オッチギン大王の帳

小砂漠から大王の帳までの経過日数が書かれていないのは、その日の内、即ち 4 月 1 日中に着いたからだろう。ハルハ川より北に、多くの人が暮らせてゴビの特徴を持っている所を求めると、内蒙古自治区の新巴爾虎左旗、48.22N118.26E である。東部にゴビが広がり、南にも少しだけゴビがある。それを越えて町に入る特徴が一致する。ハルフ・ゴルから川に沿って新巴爾虎左旗まで行っただとすると 80km ある。これを 3 日であるから 27km/d の速度になり、牛車行である。

ケルレン河

河が湖水となっていたというのだから、河口まで進みフルン湖を見たのだろう。新巴爾虎左旗より道路を西北にたどって現在の呼伦苏木（フルンスム）辺りに達したとすると 122km ある。4 月 17 日に出て 5 日の旅だから到着日は 4 月 21 日、速度は 25km/d となる。住民が魚を取っているのをゆっくり眺めているので、5 日目はかなり早く着いたのだろう。実質 4.5 日とすると、27km/d の速度となり牛車の速度である。ここで重要なのは、本文の日数と妥当な速度で、ケルレン河口という推測の入らない地点に至ったことである。従って、新巴爾虎左旗を大王所在地としたこと、及びハルフ・ゴル集落を魚児灤からの到着地としたことも正しかったと考える。フルン湖の周囲は数百里と表現されている。数百は 500 前後のことであるから、一里 0.57km とすれば、現在の湖水周囲長 220km は 385 里となり一致する。

魚児灤からハルフ川の経路

ここで魚児灤からハルフ・ゴル集落までの経路を考える。魚児灤から東北に草原を進んでいるので現在の錫林浩特（シリント）の町を通過しただろう。そこからシリン川の東に沿って北に進むのが旧来の道路であろう。内モンゴルから現在のモンゴル国にどこで入ったかが問題である。東烏珠穆沁（東ウジュムチン）旗にモンゴルに繋がる道路があり、一つは省道 204 で西に向かう道で、もう 1 つは省道 101 の西にある県道 915 で北に向かう道である。F. に途を変えなかったとあるので、南からやって来た一行が、西に大きく振れる省道 204 を選んだとは考えられず、そのまま北に道をとったのであろう。県道 915 には並行している幾筋もの通行痕がある。46.21N117.19E 辺りから県道を離れて行き、46.36N117.24E 付近で国境を越え、ほぼ真っ直ぐ北にモンゴルのタムサ・ブラグの地点に向かっている。そこからは東に振れるが大きな進路変更なくハルフ・ゴルに到着したのだろう。東ウジュムチンからタムサ・ブラグ経由ハルフ・ゴルまで 307km である。これに魚児灤から東ウジュムチンの距離 315km と、ハルフ・ゴルから大王の帳までの 80km を加えると 702km となる。3/5 魚児灤を発し、大王の帳に 4/1 着だから、日数は 27 日で、速度は 26km/d となる。牛車による移動である。

日食を見た地点

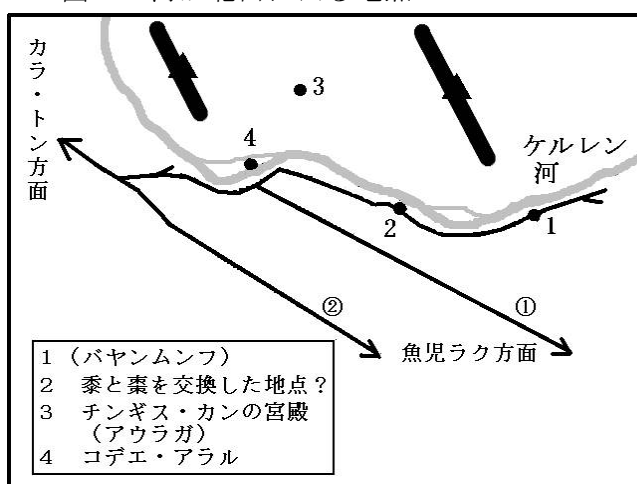
I. は河の特徴からしてモンゴル国のチョイバルサン付近であろう。ケルレン河口を 4 月 22 日に出たとして 5 月 1 日に到着しているのだから 10 日間の移動である。日食は立ち止まって 2~3 時間ほど見ただろうから、実質 9.7 日くらいか。河口から本文通り河の湾曲にほぼ沿った形で進み、48.44N115.30E—48.45N115.12E を通って再び河に出たであろう。そのような通行痕が見える。270km 程の距離になり、移動速度は 28km/d となる。大きな湾曲部に沿わず真っ直ぐ進んだとすると 220km となるが、通行痕がはっきりしないし、速度が 23km/d と遅すぎる。日食を見たのは河の南岸にいる時と書かれているので、この後、河を北に渡

って現在のチョイバルサン市の地点に向かったと思われる。

1. 4 日食を見た地点→人烟が多くなって来た地点

- J. 16日行程で河は曲がり西北の山に去っているが河源は分からない。西南には泊駅路が走っている。蒙古人は真人の到着を喜び、黍を1石5斗献上し、真人は橐を与えた。
- K. 10日後、夏至になった。このころから急峻な大山が見え始め、西の方は山や丘が増え、人烟も多くなって来た。
- L. 更に4日行程の後、西北に進んで川を渡った。東西の方向に故城の遺跡があるが、基礎跡は新しく見え、街路ははっきりしている。契丹人が建設したものだろう。

図4 河が北西に去る地点



2の地点拡大図

42.928N, 109.400E



河が北西に去る地点

北西からケルレン河が流れて来る地点は、47.0N109.2E 付近である。元朝秘史にあるコデエ・アラルが先ず候補に上がる。図3の3は近年発掘されて明らかになったチンギス・カンの宮殿跡アウラガである。白石の書によれば、ここに住む人々のために黍を栽培していたとある。コデエ・アラルまでとすると、チョイバルサンから河沿いに475kmあり、16日行程なので30km/dの速度となる。ケルレン河沿いの水草に恵まれた平坦な道のようなはあるが、同じ条件のはずのケルレン河口からチョイバルサンまでの速度より早い。もしも20~30km東、即ちバヤンムンフとの中間あたりであったとすれば、450kmで28km/dの速度となり、それまでと同じ数値になる。ちょうどその推測地点、46.928N109.400Eに230m四方の町らしき遺跡が見える。ここに到着したのではなかろうか。4の地点とすると、次の行程速度が遅くなりすぎる。西南に泊駅路があるのは、岩村の書によれば魚児楽への駅伝路とのことである。現代のモンゴル道路地図で見ても、この辺りからコリチャガン湖方向に向かう2本の道路がある。GMapでも河の西南に走っている道路痕が2本見える。これが昔から漢土への道として知られているテレゲン道であろう。近い方の①は4の付近でケルレン河沿いに進んで来た道と合流し、②は、もう少し北で又合流する。2の地点から①へは4kmほど、②へは20kmほど離れている。2の辺りから①の道を指している可能性が高いように思う。

夏至の日

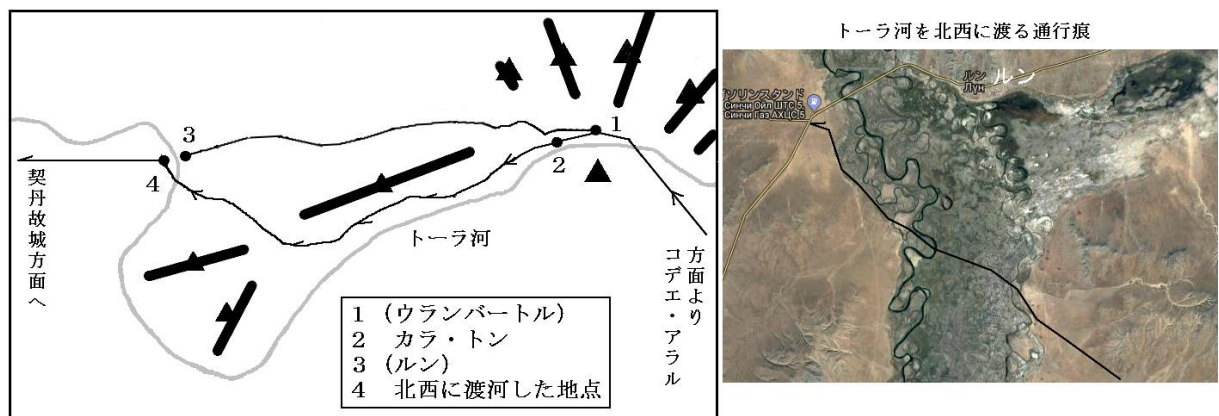
新暦では大体6月21日と22日で、1221年の旧暦に直すと5月30日か6月1日である。ところが、f.の5月1日に、G.とH.の経過日数26を加えると、5月27日に夏至になったこ

とになり、3、4日の狂いがある。どこに狂いがあるのか筆者には判断できない。

人烟が多くなって来た地点

J.の地点から10日間を28km/dで進んだとして280kmである。その範囲で人の多い場所を求めれば、ケレイト部族の根拠地として有名だったカラ・トンしかない。カラ・トンはウラン・バートル市の郊外にあるハル・ショゴイ遺跡(3)だとされていて、現在の市中心より20kmほど西にあるソングン保養所、47.85N106.67Eの近くらしいが、具体的な地点をGMap上で見つけられなかった。急峻な大山や、西に山や丘が増えたとする地勢の記述も実際と合致する。少し手前でその辺りを見て、「人烟が多くなってきた」と言っているのだろう。即ち現在のウラン・バートル市の西で夏至だったことになる。カラ・トン着は、推定される夏至日の5月27日に1日加えた5月28日となると考えられ、計11日間の旅だったことになる。だが、到着した11日目の観察描写が多いから、かなり早く到着してくつろいでいる様子であり、後の考察結果も併せると実質10.2日ほどの旅だろう。距離は図3の地点2から265kmなので26km/dの速度となる。今までより少し遅いのはカラ・トン辺りの標高が高いせいだろうか。前節の宿泊地をコデエ・アラルだとすると、235kmの距離になるので速度が23km/dになり、遅すぎる。

図5 河を西北に渡った地点



川を西北に渡った地点

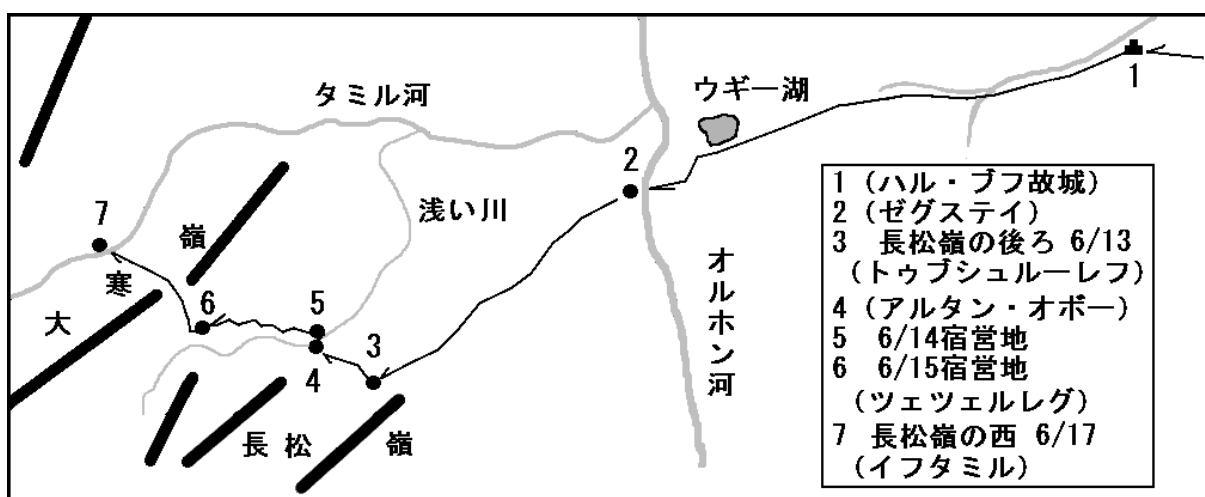
ウラン・バートルの真西にあるルン (Lun) の町でトーラ河が大きく屈曲している。その辺りを渡ったのに違いない。渡河後、東西に契丹人の建てた故城を見たところがあるのがその理由である。小さな砦のようなものはモンゴル内に多く点在しているが、城とは壁でかこまれた町のことから、街路のある大規模なものである。そのような所とは、ウラン・ヘレム (47.93N104.54E)、チン・トルゴイ (47.87N104.25E)、ハル・ブフ (47.89N103.90E) の遺跡が二十数キロメートル間隔で東西に並ぶ一帯であろう。これらは十一世紀の契丹人の建築による城であることが調査で明らかになっており、史書にある防州、鎮州、維州に比定されている。故城とあるのに街路が新しく見えたところのは、草地でなく土の地面が見えていたので、最近まで使用していたように思ったのだろう。この点は「クイテンの戦場はどこか」で詳述する。現在の街道はウラン・バートルから少し北に出てほぼ真西に向かい、ルンの町を過ぎて西に渡河する。この道であると、渡る方向が記述と異なるが、その8kmほど南に、河を北西に横切る通行痕がはっきりと確認できる。その道は東南の山地から伸びて来ているので、カラ・トンから先ずトーラ河沿いに南西に進み、フスタイン (Khustain) 山脈を北西に横切って再びトーラ河に出て、河を北西に渡りルンの対岸に出る経路を取ったものと思わ

れる。距離は 135km あり、4 日掛かっているので 34km/d の速度となるが今までと比べて速すぎる。早くなる何らかの理由があったと考えるか、日数 4 日を 5 日の間違いとするかである。後者とするとも牛車の速度として 27km/d とちょうど良くなり、こちらの可能性が高いように思う。カラ・トン出発が 5 月 29 日で、4 日かかったとあるが実際は 5 日だったと考えたと、6 月 3 日にルンの対岸に着いたことになる。

1. 5 故城群→長松嶺の西

- M. 六月十三日、長松嶺の後ろに宿営した。松や檜の類が森森と茂り、谷にかかる雲は日を覆っている。樹木は山の北側の溪谷に多く、南側には少ない。
- N. 十四日、山を過ぎ浅い川を渡ったが気温は極めて低い。平地に宿した。十五日は暁に起きたが、天幕の周りには薄氷が張っていた。雨や雹にたびたび遭い、山道は曲がりくねっていた。
- O. 十七日、長松嶺の西に宿した。初伏の節であったが朝暮には氷霜が 3 度あり、河水は真冬のように冷たい。地元の人が言う。「今年はまだ温かい。平年はまだ 5、6 月は雪がある。真人はこの山嶺を大寒嶺と名付けた。

図 6 契丹故城から長松嶺の西



長松嶺の後

故城址を過ぎてからの方角と光景描写がないのは、特徴の乏しい草原をひたすら移動していたからだろう。六月十三日から木々が多く山深い長松嶺という山名が出てくる。かなり南に下ってハンガイ山脈の中心部の北側に近づかないと書けない表現である。嶺の後ろとあるから、これから越えようとしているのだろう。最短距離を進んだであろう事と、十四日以降の移動状況を考え合わせて、経路と到着点を上図 6 のように推定した。

一番西の故城址ハル・ブフから西へウギー湖の南に向かう。オルホン河を渡り現在のゼグステイ (Zegstei) の町を経る。ハルホリンーツェツェルレグ (Tsetserleg) を結ぶ路線に出てから、少し先のトゥブシュルーフ (Tuvshruulekh, 47.38N101.91E) の村まで行く。275km の距離があり、6 月 13 日着だから、日数が 10 日間では速度が 28km/d となる。前節のトーラ河渡河が 4 日であれば 11 日間となり 25km の速度となる。障害の少ない平坦な道にしては遅いので 5 日で正しかったようである。木々の濃さと山が重なっているのを間近に

していることからして、この村が長松嶺の後の地点にふさわしいと思う。そこには泉もある。更に山奥にも村落はあるがあまりにも孤立している。ハルホリンーツェツェルレグを結ぶ現在の路線の交点で停まった方が次の旅に都合が良いであろうが、山の後ろには見えない。

六月十四日以後の地点

トゥブシュルーレフの村から 16km 程西北に進み、アルタン・オボー村の北で川を渡る。N.で言う浅い川であろう。6/14 の宿営地を 47.45N101.75E 地点と推定する。そこからツェツェルレグに向かう道は記述の通り屈曲が激しく、宿営できるところがないので早めに停止したのだろう。次の日は 22km 進んでツェツェルレグ (Tsetserleg) で宿することになる。その先は山越えてイフタミル (Ikhtamir) である。距離は 28km ほどであるから、平地なら 1 日の距離だが、山越えをするので 2 日かかり、17 日の早くに着いたと思われる。ここが長松嶺の西に当たる。この先に集落はしばらくなく山道ばかりが続くので、それ以上進まずに準備を整えたのだろう。東に見る大きな山塊は長松嶺の後ろで見た嶺とは別の嶺だったので大寒嶺と新たに呼んだのだろう。長松嶺の後から 66km あるので平均速度は 17km/d となるが、一日中進んだのは 15 日と 16 日だけであろう。到着日も入れて 5 日間のこの区間だけが日付も入れて妙に詳しく書かれているのも、14、17 日の移動距離が短くて時間的余裕があったからであろう。なお、イフタミルにはザーンホショーやタイハルの別名もあるようだが、どれが正しいのかよく分からない。

カラコルムを経由したか

六月十三日の到着地をカラコルム、即ち現在のハルホリン (Kharkhorin) ではないかと思いたくなる。当時征西の兵站基地として機能していたと言われており、一行が補給のために立ち寄った可能性が考えられるからである。トーラ河を西北に渡った地点から 280km と見積もられるので距離的にも可能である。しかし、ハルホリンの位置は西に山並みがあっても木々が濃いように見えない。そのような山深い所であれば都になるはずもない。この後の 4 日間の行程もうまく解釈できないので立ち寄った可能性はない。

浅い川

岩村は渡った川をオルホン河としているが、以上の推定により、アルタン・オボー付近で越えた川は、その支流であるタミル河の中間に南から流入する流れである。名は分からない。

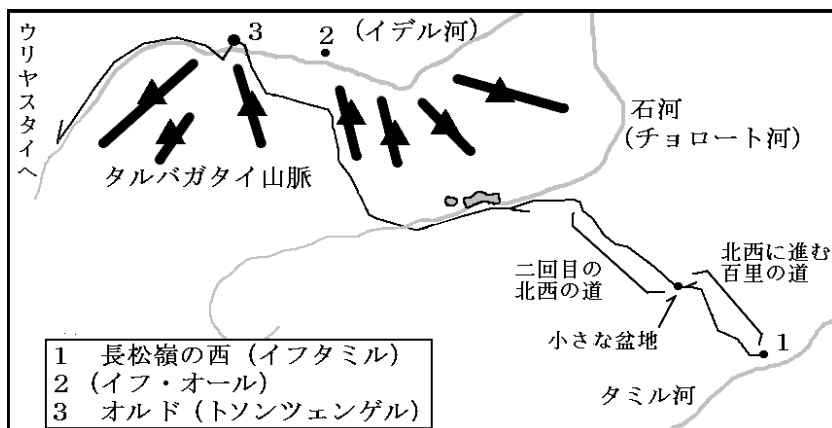
1. 6 長松嶺の西→オールド

- P. 山道は曲がりめぐって、西北に行くこと百里にして又西北に向かい初めて平地にでる。石河があり、長さ 50 余里、河岸は深きこと 10 余丈。水の音は清冷。山は西に連綿としている。
- Q. 更に 5,6 日の間、峰はめぐり、道は転じ、樹木の繁茂している連峰の下には溪谷の水が流れていた。
- R. 28 日、オールドの東に宿し、皇后に奏した。川を渡って来るようにとの仰せがあった。この川は東北に流れており、渡って南岸に停めた。漢と夏の公主に贈り物をもらった。

西北又西北の道

イフタミルから山道が北西に伸びている。それを進むと道が二股に分かれるが、どちらを行っても小さな盆地のような所（47.83N100.86E）に着き、西の隅に小さな集落がある。ここまでの 50km の道が、西北に行くこと百里にして、の部分だろう。本文通り再び道は西北に向かう。

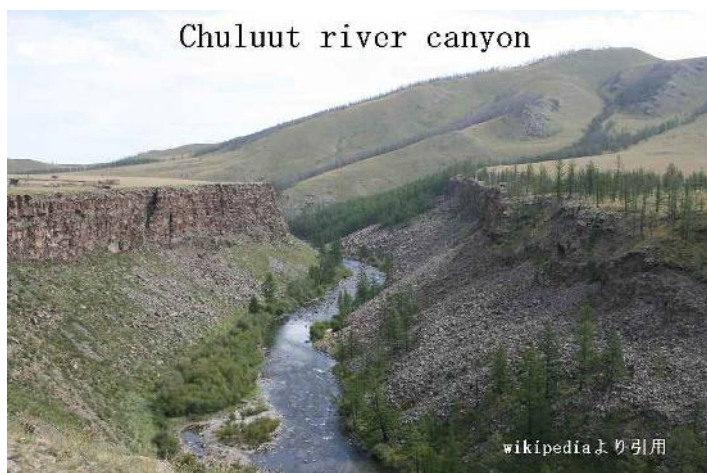
図7 長松嶺の西からオールド



石河

行くこと 60km ほどで再び平野に出ると、チョロート川（Chuluut Gol）が流れている。モンゴル語の意味は「石の多い川」である。石河の名にふさわしい景観は図8を見ての通り。近年は魚釣り、溪流下りなどで観光地化されている。類似した景観はここ以外にもあるようだが、英語のネットサイト(8)で見ると、“Chuluut canyon stretches 25 km in long, above 20 m in high.”の表現がある。原文の「長さ五十余里」は $52 \times 0.57 = 30\text{km}$ 、「川岸の高さ十余丈」は、 $12 \times 3.1\text{m} = 37\text{m}$ であるから、長さはよく一致し、高さも写真で見ると誇大ではない。チョロート川そのものの長さは 400km を越えているが、代表的な景観の所は 100km 程度らしい。その中でも特徴的な場所の距離が五十余里、英語サイトでいう 25km なのだろう。石河はチョロート河に間違いはない。西北に進む事を 2 回繰り返してやって来た路の特徴と共に、石河への出発点であった「長松嶺の西」が、現在のイフタミル以外にありえないことを証明し、長松嶺の後ろの地点がトゥブシュルーレフであることの蓋然性を高めている。

図8 石河



オールド

石河に着いてからの方向が書かれていないが、現在の街道通りに西に進んだのだろう。道は北西に向かってタルバガタイ山脈へと分け入る。Q.の描写はチョロート川の水源の一つであるこの山脈を横断している光景である。P.で、「山は西に連綿として続く」とあるのも、この山脈の眺めとすれば妥当である。そこを越えるとイデル川 (Ider Gol) の中流あたりに出る。川の流れは、全体としてみれば東北に向かいセレンゲ川に合流する。

28日に皇后に奏したのだから、オールド到着日は6月29日であろう。イフタミルを18日に出たとして、12日を要したことになる。オールドは山脈を抜けたイデル川沿いにあったのに違いなく、それらしい所はイフ・オール(Ikh uul)かトソンツェンゲル (Tosontsengel) の町である。チョロート河からイデル河方面に出る現在の街道はイフ・オール方面に向かうが、少し前のモンゴルの地図を見るとトソンツェンゲルに向かう道しかない。こっちの方が昔からの道だったようだ。とすると、オールドはトソンツェンゲルにあったのだろう。305kmほどであり、25km/dの速度になるのは山道だからだろう。

河を南に渡ってオールドに着いたとあるが、現在の町はイデル河の北岸にある。そうするとその時期オールドは南岸に設営されていたのではないか。一行は北にあると思い河を越えて北岸を進んでいたのではなかろうか。

このオールドは漢と夏の公主という異民族のカトンのもので、モンゴル人カトンはいなかったらう。後に出て来るチンカイ城に金の章宗の二妃がいたことが知られるが、同じように、モンゴル本土の奥深くに留め置かれて、幽閉のような処遇を受けていたと思われる。懐かしい本国の著名人一行が来たので随分歓待している。

1. 7 オールド→ウリアスタイ

- S. 7月9日、西南に5,6日進んだ。山上に雪があり、山の下にはところどころに墓があった。高い所には陵墓があった。更に2,3日にして一山を過ぎた。その高峰は削ったごとく、松杉が鬱然と茂り湖があった。
- T. 南に大渓谷を出ると一水流が西に流れ、雑木の林が河の水に映り、ニラが茂っていた。
- U. 狭い道を行くこと数十里にして北に故城址曷剌肖 (uliastai) があった。
- V. 西南行して砂漠を20里ほど進んだ。

西南に向かう

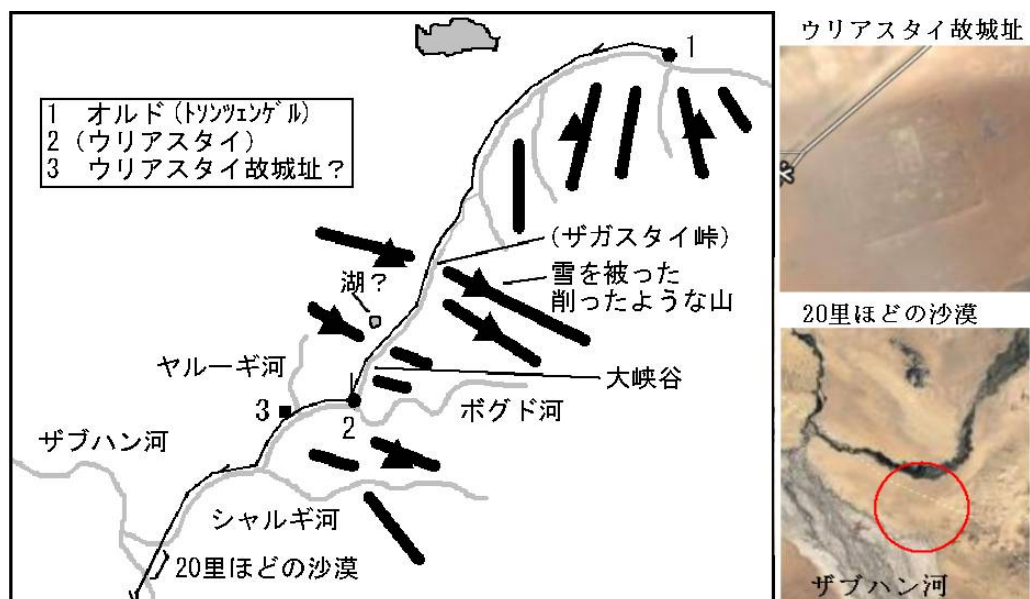
今まで進路方向については西か西北しか出てこなかったが、ここで南が初めて出て来る。今までも南に進んだ事はあったが述べていないのは、その先はまた西か北に進むことが分かっていたからだろう。進行方向がここから大きく変わると言う認識が一行にある。道形に南に向かえば現在のウリアスタイ市に至る。削ったような山があるのはザガスタイ (Zagastajn) 峠というようである。その東西にある山は高そうで、この季節に雪が積もっていてもおかしくはなさそうであるが、GMapでは名が分からない。

ウリアスタイ

巾1kmほどの谷をチゲステイ川が南流してウリアスタイへ向かう。そこが大峽だろう。ウリアスタイの北部まで25kmほど続く。その入り口辺りにあるとされる湖だが地図にない。だが、渓谷の入り口の直ぐ西の47.97N96.93Eに湖の痕らしきものがある。当時は水をたたえていたのではなかろうか。渓谷を流れるチゲステイ川は、東から西に流れるボグド川に合

流する。これが「一水西流」のことであろう。二つの川の合流点に現在のウリアスタイ市があり、雑木の林とニラの茂みがある地点だろう。当時も駅亭があったのかも知れない。不可解なのは、ここに来て経過日数が、「5,6日進んだ」、「更に2,3日にして」とか急にあやふやになって来ていることである。この後も、「5,6日して山脈を越え」となっている。長い旅で李志常に疲れでも出たのだろうか。トソンツェンゲルからウリアスタイの距離は180kmなので、最小値7日と最大値9日に溪谷通過の1日を加えて、8日から10日の間とすると、速度は23km/dから18km/dの間となり遅すぎる。この行程の矛盾は後述。

図9 ウリアスタイから20里の沙漠



ウリアスタイからの進行方向と故城

現在南と西に向かう2つの道がある。南に進んだとすると、後に出て来る「北に故城址が見えた」と言う記述に矛盾する。ボグド川北岸の狭い道を、川に沿って西に進んだのだろう。しばらく行くと北からヤルーギ川が合流する。それを越えた直ぐの、47.70N96.62E 地点に400m四方の城郭遺跡の存在が認められる。市中心から21kmほどの地点なので、数十里を40里前後とすれば距離が合う。この故城遺跡の南門の前を通過したのだろう。この遺跡の性格を知りたいが情報が得られない。

20里進んだ砂漠

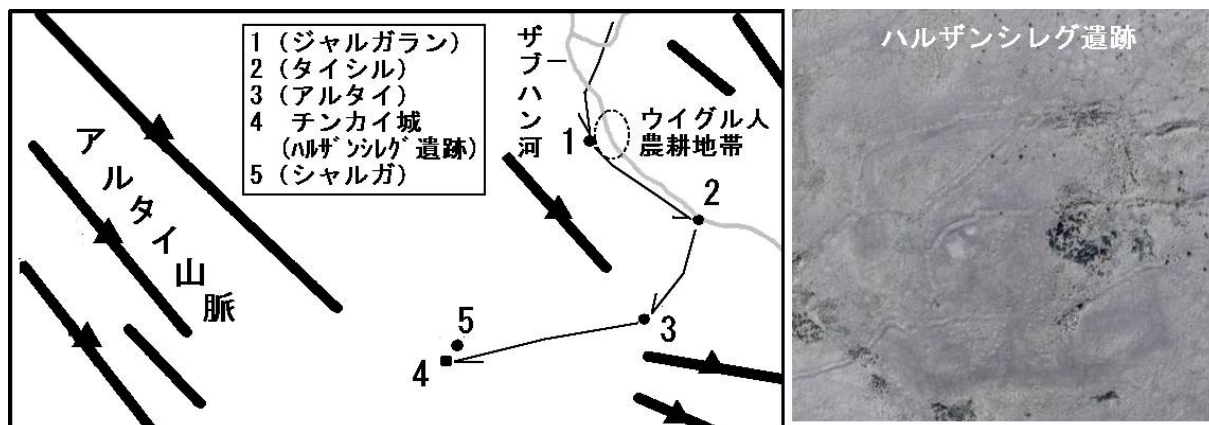
ウリアスタイを出てからボグド河に沿って下るとシャルギ川に合流する。川は再び南西に流れているので更にそれに沿って進むと、川が北西に屈曲してザブハン(zavkhan)川に合流する地点がある。ここに二つの川に挟まれたような形で砂漠がある。それを南西に横切れば早くザブハン河に至る。距離は10km程だから、20里ほどという記述に合致する。

1. 8 チンカイ城まで

- W. ウイグル人が水を引いて麦畑に灌漑しているのを初めて見た。更に5,6日して山嶺を越えて南に進み、モンゴル人の宿舎に泊った。朝早く出発したが、南の方には山脈がうねうねと連なり、山嶺には雪がある。駅伝の吏が言う、「あの山の北に田鎮海のバルガスンがある」

- X. 7月25日、漢人の工匠たちが次々と迎えにきた。金の章宗の二妃と漢の公主の母が相迎えた。
- Y. 翌日、阿不罕山の北で鎮海が出迎えた。

図10 チンカイ城へ



ウイグル人の麦畑

その位置はザブハン(zavkhan)川流域のジャルガラン(jargalan)周辺と見なされている。そこから、タイシルの町に向かうのが現代の道路だが、アルタイ市に向かって南下直行する道も見える。タイシル経由だと距離が130kmとなり、直行すると110kmになる。5,6日で到達したとする記述には南下直行路は短すぎ、水の便も考えるとタイシル経由だったと思われる。W.はアルタイ市を西に向かい峠越えをした地点だろう。

チンカイ城到着

チンカイ城の半日ほど手前で漢人たちが出迎え、鎮海は貴人への礼として城門を出て一行を出迎えたのだろう。即ち、7月26日に真人一行はチンカイ城に到着したのである。城の位置は近年明らかになっており、アルタイ市西方約80kmにあるシャルガ近郊のハルザンシレグ遺跡、46.2154N95.2285Eである。7月9日オールド出発であったから18日の旅であった。

移動距離と速度

トソンツェンゲルからチンカイ城まではほぼ500kmあるので、速度は27km/dとなる。これからすると、前節のウリアスタイまでに計算した速度の23km/dが遅すぎることになる。そこまでオールドから180kmだから、27km/dでは7日の計算になる。渓谷の手前までは1日を引いた6日でなければならない。すると、S.の日数の内、最初の5,6日が記述として正しく、後の2,3日は不要と言う結論になる。

宣徳州出発から総距離3,000kmほどを5カ月と19日で走破した訳である。魚児渚、オッチギン大王の帳とオールドでの滞留期間があるので、平均速度は18km/dとなる。

この後

真人は鎮海に対し、老齢である事をもって、この地でチンギス・カンの帰還を待つことを提案する。李志常の記録の乱れからしても、半年になろうとする旅に一行は相当に疲れていたのに違いない。が、鎮海は主の通達があるので絶対に西域に向かわねばならないと告げる。それに従い、一行は人員を9人減じ、残った者はこの地に道観を立てて真人たちの帰還を待つ事にする。再度旅立ったのは8月8日のことであった。更に3,000kmを越える旅をして、真人一行がチンギス・カンに出会うのは翌年の四月五日、宣徳府を出発して一年二カ月後となる。

1. 9 第1章のまとめ

以上検証して来たように、可能な限り原文を忠実に読み、グーグルマップで実際の地形と比較しながら経由地点を求めた。街道は自然地形に左右されるが、現在も大きくは変化していないようである。現代の主要道路と異なる経路を推定した部分もあるが、明瞭な通行痕を地図上に確認して行った。だが、現在残る痕がいつの時代のものかとか、街道の変遷などの調査は更に必要である。詳しい距離を出せたのは GMap の機能の威力であった。

①西遊記の表現の傾向

「～を過ぎた」との表現がよく出て来るが、これは、～を過ぎて 10km ほど進んで宿泊した場合に用いられているようである。また、河川はいくつも渡ったであろうが、渡ったとはほとんどの場合書かれていない。「川を渡った」と表現されている例は、川を渡って直ぐに宿泊した場合に限られているように思われる。

又、数日間滞在した場所を除き、宿営した土地の人たちとの交流や観察を記した個所がいくつかある。ケルレン河口、ケルレン河変曲点付近、カラ・トン、長松嶺の後ろと西である。これらの地点には恐らくその日の早くに着いて、半日近い時間のゆとりが出来て交流や観察の記録になったものと思われる。これらの行程は、到着日を 0.5 日ほど短く見る必要がある。

②速度

地点と経路を推定して距離を求め、一日当たりの速度をもって、推定の妥当性の基準とした。速度は 25～28km/d の範囲にあり牛車行と推測された。従来、牛車の速度は種々の文献で 20km/d を少し超える程度とされているが、20km は旅に慣れない出発後の数日だけで、思いのほか早かった。時速 4km で一日 7 時間進んでいる計算になる。チンギス・カンによって招聘されたという特殊事情があり、宿駅ごとに元気な牛馬の提供を受けながら旅をした為かも知れない。又、当然のことながら、通った道の環境によって速度の変化が見られた。即ち、長松嶺の西からオールドに向かう経路のように、勾配、屈曲の多い山道では 25km/d と速度が下がり、ケルレン河行程のように、水草が多く真っ直ぐな道が多ければ 28km/d の速度で進んでいた。33km/d が、カラ・トンからトーラ川西への行程で出ているが、日数の間違いの可能性が高い。道の条件に恵まれれば、例えば下り坂が多いとかであれば出ることもあるのかも知れないので、現地をよく見て判断する必要がある。

騎馬行が却って遅かったのは土地の影響もあるが、それより、乗り手の体力と技量の問題であろう。2 章以下では騎馬行が増える。チンカイ城までの間に、七十歳半ばの真人を含めた一行全員が騎馬行に習熟したと思われる。

③ケルレン河変曲点

ケルレン河が西北に向きを変える地点であるが、速度をそれまでと同じく 28km/d とすれば、コデエ・アラルから 30km 東、46.93N109.40E の 230m 四方の町らしき跡と推定できた。調査は進んでいるのであろうか。

④今後の課題

確認の必要な点をまとめる。

地理学的には、

- ①コデエ・アラル東の駅亭位置の確認。
- ②カラ・トンからトーラ河渡河経路。
- ③長松嶺の後ろから西の経路。
- ④トンソンツェンゲルからウリアスタイに至る道。
- ⑤ウリアスタイ故城の実態

などがある。

天文学からは、

⑥チョイバルサン付近で見た日食の見え方。

⑦当時の暦による夏至日。

文献学からは、

⑧コデエ・アラル付近にあると思われる駅亭と魚児楽に至る駅伝路の確認。

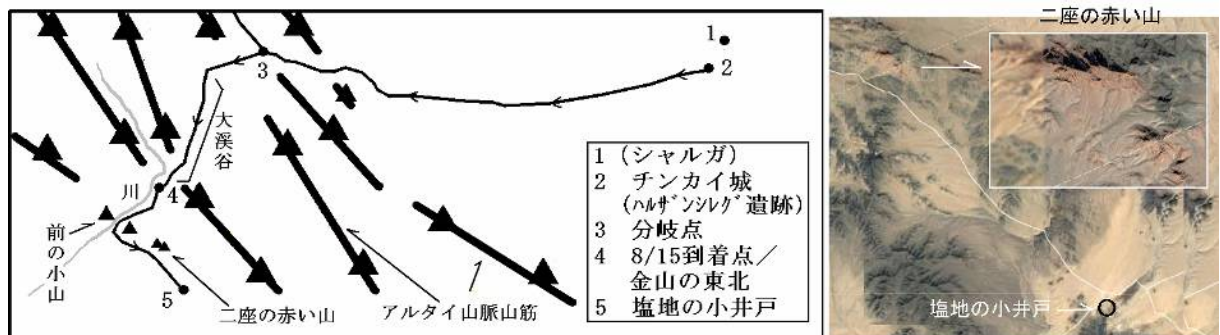
以上を確定すれば、より信頼性のあるものとなるだろう。

第2章 チンカイ城から大石林牙

2. 1 チンカイ城出発→大溪谷越え

- A. 八日（八月）、門人虚静先生趙九古ら十人、二台の車、蒙古駅騎二十余を従え、大山のかたわらを西に進む。劉仲録と鎮海丞相が百騎を率いた。
- B. 西南行すること約三日にしてまた東南の方、大山のかたわらを過ぎ大溪谷を越えた。
- C. 中秋の日、金山の東北に至り、少し留まってからまた南に向かった。
- D. その山は広大で深谷長坂あり車の通行は不可であったが、第三太子のオゴタイが兵を出して初めてその道を開鑿した。一行は伴ってきた百騎の兵に命じて車轅をかけて引かせて車を上げ、また下りには輪を縛って降りなければならなかった。
- E. かくて四行程に五度、山嶺を越え、南行して山前に出て川の岸に宿った。同行のものは天幕を連ね宿営を張った。そこは水と草の便が良かったので、駅伝の牛馬を待ってから、数日進んだ。川を渡って南に進み、前の小山を過ぎたが、そこには五色の石があった。またその付近には草木は七十里の広きに渡って生じていない。また二座の赤い山が道に当たってそびえていた。さらに三十里の間は塩が地に吹いている土地で、そのなかに一か所の小さい砂中の井戸があった。そこに止まって水を汲んで食事を整えた。付近には青草があり、羊や馬が放牧されていた。

図1 チンカイ城から塩地の小井戸



大山のかたわらを西に進む

シャルガ地域は山に囲まれた盆地のような所である。西に向かう道が今もあり、それを進んだのを、大山のかたわらと表現したのだろう。そのまま行くと、現在のトンヒル村の南からアルタイ山脈に入りこむ。入ってしばらくすると、道が北と西に分岐する地点 3、46.27N93.63E がある。ここまで出発地から 140km である。車があり牛がいるので、騎馬隊が多くても牛車の速度でしか進めない。28km/d で進んだとして 5 日かかるだろう。

西南行すること三日

分岐点を北に向かうとアルタイ山脈の中に入り込んでしまい、残り 3 日で山を抜けられそうにない。西南に方向を変えたのはここと思われる。曲がりくねって南に下る道のあるところが大溪谷であろう。下り終えた所には峠の終わり頃から続く河が流れており宿営地にふさわしい。45.93N93.22E である。分岐点からの距離は 64km あり、3 日だと速度は 22km/d となる。実際は 2.6 日の 25km/d くらいか。中秋は 8 月 15 日なので、出発から 8 日目とな

る。経過日数は A.行程の推定 5 日と B.に記述の 3 日の計に等しい。

金山の東北

8/15 の宿営地は北西から南東方向に見通しが良いようである。西北に伸びるアルタイ山脈の主脈の東北面が見えたので、東北の地点に達したと書いたのだろう。

その山と川

南に進んだとある直後からこれらの文が続くので、8/16 以降のことしたくなるが、そこにはこのような山道はない。その山とあるし、内容からしても、D.と E.は、B.でいう大溪谷を越える時のことを述べていると考えられる。その山とは大溪谷を作っている山である。四程に五度山嶺を越えたというのは、A.の行程の最後の 1 日に嶺を 2 つほど越えているので、B.の 3 日に加えた 4 日で 5 度嶺を越えたと言っているのである。要するに、B.と C.までの行程に A.の最後の日を加えた行程を振り返って、大変な道であった、と述べている。当然、E.の川は峠の下り途中から流れている川である。次の F.で出て来る川も同じものである。ここで作った詩に大河と書かれているのは誇張して面白がっているのだろう。他に河が見当たらないので、その辺りでは大河である、とも言える。

金山の東北を出発した日

少し留まったとあるのが駅伝の牛馬を待っていた時間であろう。せいぜい 1 日とすると、16 日が休憩で出発は 8 月 17 日となる。岩村本は数日待ったと訳しているが、後で述べるように、数日も待っているようではこの後の日数が全く足らず、和州にたどり着けない。

前の小山、赤い山、砂中の井戸

E.で、数日進んだ後に再び渡河となっているが、数日間の地理描写がない後に突然詳しくなるのはおかしい。ここも大溪谷の場合と同じで、数日進んだ内容を以下の文章で述べていると考えるべきである。渡河した河とは当然出発地の、即ち金山の東北の地点に流れていたものである。そこから現在の道に従って南に進むと直ぐに岩山を越える。これが五色の石があったという前の小山ではなかろうか。45.87N93.15E にある。山の間を河沿いに進むと別れ道、45.84N93.07E に出る。現在の大きい街道へ進むとアルタイ山脈の西北に向かい和州方向から外れるので、ここで道を南東に取ったであろう。そこから 10km 行くと、北側の 45.81N93.19E 地点に赤っぽい山が二つある。これが二座の赤い山であろう。更に進むと道が何本か集中している所があり、小さな集落がある。側に塩地らしい白い場所が見えるので井戸の地点であろう。45.70N93.33E である。赤い山から 17km なので、30 里という距離に一致する。出発した金山の東北地点からは 44km なので 77 里になる。だが、岩山の入り口までの数 km ほどは草があったと考えれば、首尾 70 里に渡って草木が生えていないというのに合致する。距離からして 1.5 日の行程になるので、塩地中の小井戸着は 8/18 と推測される。なお、岩村本の原注には 8/15 到着点に流れていた川をウルンガ河としているが、西に 400km 以上離れており到底行き着ける所ではない。

2. 2 小井戸から和州まで

- G. 劉仲録は鎮海に、「この先は最も難しい場所だがどうするか」と相談した。鎮海は、「この地は以前から知っている」と言った。二人で真人のもとに行って説明した。鎮海いわく、「この先に行けば白骨甸で、地面は黒石である。二百里余里行けば砂漠の北辺に達していますが水と草が豊富です。さらに大砂漠を渉ること百余里ですが、砂漠の東西の長さは幾千里あるかわかりません。ウイグル人の城市に着けば水と草を得ること

ができます」。真人は、「なぜ白骨甸というのか」と尋ねた。鎮海は答えて、「昔から戦場から疲れた兵がここに逃げてくれば、十に一人も還ることができない死地だからです。先年もナイマンの軍兵が多くここで死にました。晴天の日の昼間に旅すると、人馬とも往々にして困憊します。夕方に旅を始め夜間に進み半ばを行います。翌日昼頃水と草を得ます。少し休んで、午後遅くになって再び旅を進め、砂丘を百ほども過ぎます。舟で大波の間を行くようです。又翌日の朝方にウイグルの城に着きます」

- H. 日が暮れると共に出発した。牛が疲れたので捨て去り、六頭の馬をもって代え、以後は牛を使用しなかった。初めて砂漠の北辺に達したとき、南の方を眺めると天際に銀霞のごときものが遠望された。これを訊ねたところ、左右の者一人として知る者がなかった。師は「おそらくは陰山（天山の意）であろうと」と言った。翌日樵に会って聞くと果してそうであった。
- I. 八月二十七日、天山の後ろに達した。ウイグル人が迎えに出て、小さな城に至った。酋長は酒、果物などを捧げて、「ここは天山の前三百里の地にある和州（火州とも。ウイグル語でカラ・ホージョ）であります」と言った。暑熱はなはだしく、葡萄をおびたしく産する。

図2 白骨甸と和州までの想定経路



経路概観

モンゴル高原から和州を東西に走る道、即ち天山北路にどのような経路で出たのか、地点を特定できる描写が少ないので、全体行程を先に考える。和州は現在の吐魯番市の南東 30km にある高昌故城の地である。火焰山の南にあり、暑さが厳しいのと葡萄で有名なのは今も同じ。塩地の小井戸から直線距離でも 440km ある。8/19 出発として 8/27 着だから 9 日間の行程である。速度が 50km/d を越えるので、早めに牛を捨てて騎馬行をしたと考えなければならない。旅の初めに車二台を伴っていると書いているが、荷物を積んでいただけのようなので、初めから全員が騎馬行であろう。漢土からの半年ほどの旅の間に、真人も含めて漢人全員が騎馬行に慣れていたと思われる。

白骨甸

大地が黒い石で覆われて 200 里続く白骨甸地域とは、図 2 に示した一帯であろう。黒い大地に、高所から時おり流れ出す川の流れに含まれる砂が作ったものであろうか、白い筋が無数に刻まれた光景が広がる。同じような光景はモンゴルの他の地にもあるが、ここは一段と

すさまじく、ほとんど草も水もないように見える。中央部にところどころ見える白い部分は塩地であろう。当然村や町はほとんどない。牛を捨てたのは小井戸を出て間もなくで、暑熱の昼間を避けて夜の内に馬で駆け抜けたのだろう。

水と草がすこぶる多い地点

白骨甸の中で水と草が多い所を探すと中国の三塘湖、44.24N93.34E しかない。現在も小さなダムがあり農地もある。そこに向かったのだろう。

塩地の小井戸から白骨甸取りつき

白骨甸に入る手前には岩石地帯があつて壁となつており通行できそうにないが、河跡と思しき道が激しく蛇行しながら何箇所もその地帯を貫いている。ただし、通行に使われていそうな所は多くなく、三塘湖方面に向かうとしたら、45.03N93.24E の地点(P3)から白骨甸に入ったのではなかろうか。わずかとはいえ緑の部分が見られ建物もある。関口の図でトビンとある地点と思われる。その北東の 45.26N93.66E (P1) には道が集まって水と草が見える。関口の図でドボインオボニとある地点であろうか。45.08N93.32E 地点(P2)にも建物があつて道が集まり、やはり水場のようなのである。塩地の小井戸から P1 まで 75km、P2 まで 115km、P3 まで 125km ある。出発した日の早々に牛を捨てたとすると、P3 まで 2 日で来ているだろう。

三塘湖から和州

P3 から三塘湖まで 100km あるので、二百余里とはこの経路ではなかろうか。日数として 1 日と少し掛かっているだろう。三塘湖からの道を南西に 40km ほど行くと視界が開け、前方南 60km 彼方に雪山が見えるだろう。天山山脈の東の支脈で、真人が陰山と言ったものであろう。そのまま進んで巴里坤哈萨克（バルクル・カザフ）自治県まで 60 数 km の道は沙漠らしく見えるので、沙漠を百余里進むと言っている部分ではなかろうか。バルクル・カザフの辺りは土地改良が進んでいるようで、現在はあまり沙漠らしく見えない。なお、砂漠の東西の長さを幾千里とあるのは、東はモンゴルのゴビ沙漠から西のグルバンチュンギョト沙漠までの 1500km ほどを言っているのだろう。この後の経路ははっきりしないが、おおむね現在の道に従い、七角井鎮を経て 43.35N91.01E あたりで西域北道の北に出たのではなかろうか。そこからウイグル人の農耕地帯まで 50km 程である。

進行速度と経路

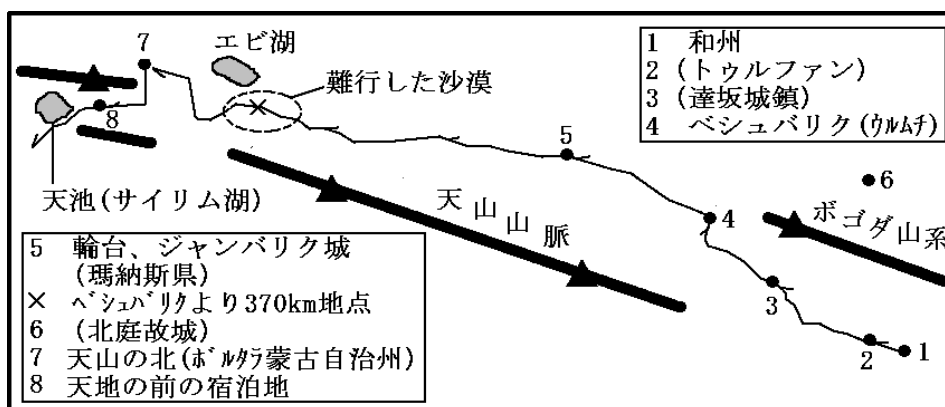
小井戸を日暮れに出発したのは、白骨甸を夜行しなければならないので、身体を慣らすためであろう。到着した翌日である 8/19 出発と想定したが、金山の東北から 1.5 日の距離なので、到着した日の午後を休憩し、その日の暮れ方に出発した可能性が高い。小井戸ーP3 間は 115km であるが、牛を初日で捨てたとすれば日数は 2.5 日。そこから三塘湖までの 110km はぶっ通しで進んでいるので 1 日、巴里坤哈萨克までは更に 78km の 1 日であろう。和州まではそこから 350km あるので、5 日行程とみなすと、全行程は 9.5 日掛かる計算になる。和州着 8/27 なので、小井戸発 8/19 とすれば 9 日となり半日不足する。どうやら小井戸を 8/18 の夕方に出発したと考えなければならないようだ。速度は平均 73km/d で夜行もしているから、かなりの強行軍である。

更に近い道として白骨甸の真ん中を横切る経路も一応考えられる。総距離 550km ほど、平均速度は 60km となる。速度的にはこちらの方に無理がなく思えるが、あまりにも緑に薄い経路なのでこれを用いたとは考えにくい。現代の主街道はあまりにも東に寄りすぎ、行程が長くなる。バルクル・カザフを出て和州までの経路については、現地の事情を調査しないと確定的なことは言えないが、図 2 と考えておく。

2. 4 和州からベシュバリク大城

- J. 翌日川に沿って西行し二小城を経た。その西にはベシュバリク大城があり、そこに至ると王を始め、官員、士、庶民など数百人が異議を正して遠く郊外に出迎えた。…。付近には唐代の辺城の跡が今もなお処々に残っている。この大城の東数百里のところに西涼府という一府城があり、その西三百里のところには輪台という県がある。師は皇帝への行在はさらにどのくらいかかるかと尋ねられたところ、一同はここから西南にさらに一万余里であると答えた。
- K. 九月二日西行する。四日、輪台の東に宿した。南の方、陰山を望むと三個の峰が突兀として天にそびえるのが見えた。
- L. また次に二城を経て、九日を費やしウイグルのジャンバリク城に着いた。その王は鎮海の旧友であったので、部族を率いウイグル僧を伴って遠く郊外に出迎えた。

図3 和州より天池まで



二小城とベシュバリク大城

28日に和州を出ると、山の南に東西に流れる小さい川がある。これに沿って西に進んだのだろう。この後、ベシュバリク城を出て西に進んだのが9月2日となっているので、城への到着は前日の9月1日だろう。ただしその日は、国王に大歓待されているので、ベシュバリク城には午前中早くに着き、ほとんど丸一日中滞在したと思われる。所要日数は、28日和州出発の4日間とするが、到着した日の移動が少ないと考えると、実質3.2日位であろう。現在の道に従って真西に進めば、天山山脈の中に入り込み、700km先の伊寧市まで大きな町はないから、ウルムチ方面に向かう天山北路を進んだのに違いない。80km/dの移動速度とすれば240km前後の距離になるから、現在の昌吉回族自治州までにベシュバリクがなければならぬ。その間にあって大きな町と言えばウルムチだけである。和州から市内まで220kmほどであり、距離は予測の範囲内である。

和州からの行程を考えると、この間にあった二城は、現在のトルファンと達坂城鎮であろうか。トルファンは騎馬で半日の距離だが、前日の移動は砂漠越えで疲労していただろうから和州をゆっくり出て、水に恵まれたここで宿泊した可能性がある。次の達坂城鎮までは75kmの砂漠であるし、道がくねっているのが丸一日掛かっただろう。そこから80kmほど進んだ地点は、現在のウルムチ市の南部になる。ここに宿したのが8/30で、9/1朝に10kmほど進んでベシュバリク大城着である。距離的には現在のウルムチ市内の真ん中辺りになる。

現在の説との矛盾

以上のようにベシュバリク大城の位置はウルムチとなったが、これは定説と異なる。日本と中国では昌吉回族自治州吉木薩爾（ジムサル）県城の北 12km にある北庭故城の地 44.09N89.21E とされており、ボグド山を越えて和州の真北方向に当たる。和州を出て西に進んだのは良いとして、そこから北に山を越えるとか、ウルムチ回りとかで北庭故城まで行くとは考えられない。もしも行きたいのなら、白骨甸を越えた後、バルクル・カザフから沙漠の縁伝いに真っ直ぐ西に進めば良い。わざわざ南に下って和州に立ち寄る意味がない。西遊記に従えば、和州から騎馬で西に、いくら多く見ても 4 日行程の所にベシュバリクがなければならず、それはウルムチしかない。

西涼府と輪台

東数百里に西涼府があるというが、和州の東ではあるまい。ベシュバリクから北庭故城を経る草原の道にあると思われる。東に 250km の地は北庭故城では近すぎるので、木壘カザフ自治県であろう。歴史的には結構古いようであるので候補地になる。これより東に町らしいものはない。

西三百里に輪台がある。これはウルムチから天山北路の西方向だろう。177km の沙湾県が該当するが、この町の歴史は清朝頃からのようなので候補になりえない。現在も輪台県はウルムチの南 440km の所にあるが、方向も距離も違う。

行在まで一万余里

チンギス・カンが攻めた一番南の城市はバルフで、アム河を越えた所である。そこまで荒っぽい距離計算で 2000km を越える。細かく見て行くと、実質 3000 や 4000km にはなるだろう。最大 8000 里ほどと計算されるので、それほどおかしいとも言えない。

輪台

漢時代は天山南路にあり、唐代は現ウルムチの事だったという。当時もウルムチを輪台と言っていたのなら、上で述べた説も覆り、東の北庭故城からやってきたことになる。しかし東からウルムチに来る道は、ウルムチの東ではなく北に繋がっている。北に宿ったと言わなければならないと矛盾する。日数は、輪台の東まではベシュバリクから 4 日だから、輪台には 5 日目に到着となる。即ち 9/6 着である。車を使用している記述があるので、ベシュバリクからはまた牛車行に戻ったようである。王が出迎えて歓待しているので、5 日目はあまり進まず、4.2 日くらいの移動だろう。牛車の速度 28km/d で計算すると、輪台まで 120km 程度の移動と推定される。ところが、先にベシュバリク城で聞いた話では、輪台は三百里の西にあるから 160km は進むはずである。とすると、日付か三百里のどちらかが間違っている。

ジャンバリク城

輪台から 9 日掛かっているので、牛車で 250km 程度進むことが出来る。ベシュバリクから輪台までの距離を加えると 370km になる。街道沿いに西にそれだけ進んだ地点は、N44.6、E83.3 の辺りの砂漠の真ん中であり、ジャンバリクにふさわしいような町はない（図 3）。ジャンバリクは、中国のサイトでは現在の石河子市の直ぐ東にある瑪納斯（マナス）県だとしている。ウルムチ即ちベシュバリクから 125km の距離であり、9 日の半分ほどで到達できるはずである。不思議なことに、日付を基に計算したベシュバリク城から輪台の距離が 120km であり、ほぼ一致した。気になるのは L の二城を経たという言葉である。J でも和州からベシュバリクへ至る道に二城の言葉があった。もしかしたら、経過日数の 9 日は和州からジャンバリクまでの総日数を述べたものかも知れない。今までにも何度かあったように、前文の内容を別の言い方で繰り返した可能性である。であれば、8/28 に和州出発だから 9 日

目は 9/6 になる。驚いた事に、ベシュバリクからの到着日も輪台と同じになった。ということは、輪台とジャンバリク城は、同じ地の異なった呼び方だったことになる。輪台の東で三個のとがった峰を南に見ているので、これをマナス県の東で確認できれば推定は確かになる。ベシュバリクから輪台までを三百里と聞いたのは、恐らく二百里の間違いであろう。

輪台とベシュバリク

輪台はジャンバリクの別の呼称であった。また、かつてウルムチも輪台と呼ばれていた。更に、ベシュバリクはトルコ語で 5 つの城の意味であった。これらを考え合わせると、二つの言葉はもともと地点名ではなくて、地域名であったのだろう。現在のウルムチ地域にあって、輪のように強固につながって地域防御を行う拠点の集合を輪台と唐時代に呼んでいた。後にトルコ族がこの地で優勢になると、主な城が 5 つあったので、自分たち流に 5 つの城、即ちベシュバリク地方と呼ぶようになった。即ち、北庭故城、ウルムチ城、ジャンバリク城、これら全てが輪台であり、かつベシュバリクであったと考えられる。その中でも中心となる城に対し、次第にベシュバリクの名が固定されてゆき、古い呼称の輪台は周辺の小さな城を、漢人のみが呼ぶようになったと考えたい。これらの城市群の中でも、東の北庭故城、西のジャンバリク城の中心に位置し、地理的にも重要なウルムチが主城としての役割が大きかったのでベシュバリクと呼ばれたのだろう。現在の北庭故城は暑を避けた夏の城としての性格が強かったのではないか。ベシュバリクの位置に関し説が種々あったのは、このような背景からであろう。真人一行が、ジャンバリク城に対しわざわざ輪台の言葉を使ったのも、輪台地域はここで終わる、という漢人らしい認識であり、ジャンバリク城までの総日数を和州から計算したのも、和州が輪台地域の始まりと考えていたからだろう。

以上の考えだが別に筆者の創見ではなく、1955 年発行の「西ウイグル国史の研究」の中で、安部健夫がベシュバリクの位置について種々の説をまとめている中に既にある。ただし、安部はウルムチがベシュバリクであるという説は問題にならないと否定している。この説の当否は著者には論じられない。

2. 6 ジャンバリクから大池

- M. 翌日天山に沿い西に進むことおよそ十行程でまた砂漠を越えた。その砂漠の砂は細かくて風にあれば流れて波のようである。集まっては地理、一寸の草もない。車は砂に埋まり、馬は遅々として進まない。一昼夜にしてようやくこの砂漠を脱した。これはけだし白骨甸大砂漠の分流だろう。
- N. 南は天山の麓で、砂漠を渡って五日を費やし、天山の北に宿した。
- O. 翌朝南に行き七、八十里の長坂を経て暮れに至って宿した。寒く、水のない土地であった。
- Q. 翌日早く起きて西南行すること約 30 里にしてたちまち大池が現れた。その周囲はおよそ二百里で形は丸く、それを取り巻いている雪嶺の姿がさかさまに池中に映じている。真人は天池と命名した。

白骨甸のような砂漠

ジャンバリク城出発は 9/7 である。現在の街道沿いに西に 230km 程行くと砂漠を越える所がある。44.56N83.49E－44.64N82.94E の間の 46km 区間である。その地域の砂漠は確かに白骨甸のような黒っぽい色をしている。沙漠の取り付きまでマナス県からおおよそ 10 日

かかったとある。牛車行で速度 23km/d である。9 日であれば 26km/d なので、この方が正しように思える。砂漠は 50km ほどの距離がある。一昼夜かけて通過したようだが、無理をすれば人も牛馬も翌日は動けなくなる。どのように進んだのかよく分からない。

天山の北

砂漠を西に越えれば緑が広がるが、近年の開発による農地だろう。以前は砂漠だったのに違う。それを西北に 100km 進むと博尔塔拉（ボルタラ）蒙古自治州がある。天山の北としてふさわしいのはここである。②から 5 日なら 20km/d の速度になる。ここまで牛車で来たのは M. の記述から分かるが、遅すぎる。5 日を①からの 135km のこととすれば 27km/d となり平地と変わらないから、難行したと言うのが分からない。次節で計算するが、砂漠を越すのに 2 日掛かっているとしなければ、日数が合わない。一昼夜と言うのは、通常の二日分ほどの距離を進んだと言う事だろう。それでも、この行程の理解はすっきりしない。その理由は、この地方の開発が進んで元の地形が分かりにくくなっていることにある。地形的な特性による移動の困難性もあるのかも知れない。

丸い大池

これは現在の賽里木（サイリム）湖である。湖周囲 90km は、ほとんど 200 里の記述と合致するし、形もだいたい丸い。流出する河川がないので大池と表現したのだろう。ここに至るには、7、80 里の坂道を越えたとある。天山の北を南に出るが、途中で西に向きを変えて大池に向かう道が坂であろう。湖面海拔 2,072m は、出発点の博尔塔拉蒙古自治州の海拔 660m より 1,400m も高いので長い坂があったのも頷ける。池の手前の宿泊地は 44.61N81.62E であろう。天山の北から 68km あるこの地の西には小さな岩山があつて湖は見えない。この山を越えて 13km 行くと、急に湖の光景が広がるはずで、30 里でたちまち池が現れたとの表現に合致する。

2. 6 大池からアルマリク城を経て山北の小城

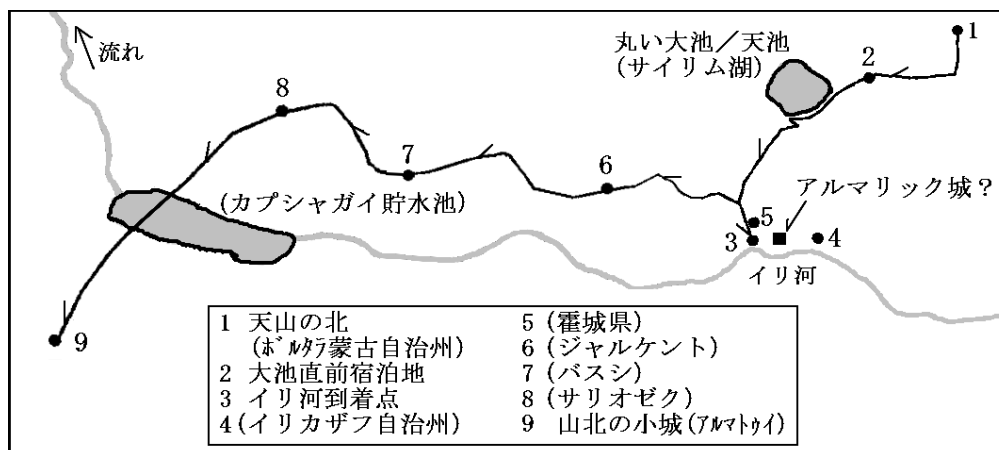
- R. 池に沿うて真南に下って行つたが、左右の峰つづきの山々は峭拔として高く、松と樺は陰森と茂り……、幾多の水流は峡谷を奔騰し、洶涌として幾度かめぐり、六、七十里を流れている。第二太子ジャガタイが……初めて石を鑿ち、道を修理し、木を切つて 48 橋を架けた。…。夕刻谷間に宿した。
- S. 翌日出発し東西に流れている大川に至った。付近は水が豊かで天候は春の如く、桑や棗の木がちらほらしていた。次に一行程で、9/27、アルマリク城に着いた。
- T. また西行すること四日にしてタラス川に至った。その川は西北に向かつて東北から流れ来り、天山を横切っている。川の南にはまた雪山があつた。
- U. 10/2 船に乗ってタラス川を渡り、南下して一大山に至った。山北に一小城があつた。

大川とアルマリク城

サイリム湖の南端から道は曲がりくねりながら登った後、直ぐに下って行く。かつて難所であつたのを、チンギス・カンの息子が橋を架ける工事をしたと書かれている。今でも河沿いに曲がりくねった 35km の道があり、それを過ぎてやっと平地になるから、六、七十里続く、の表現通りである。S. の東西に流れる大川とはイリ川である。湖を過ぎてから河まで 118km であるが、湖を離れてからの上りの坂道は特に激しく屈曲しており速度は上がらないだろう。50km 地点である 44.45N81.08E に少し広い場所があるので、ここに宿したとする

と、残り 68km でイリ河に到着となる。43.96N80.87E となるその地点が正しければ、10km ほど東の赤四角地点、現在の可克達拉市付近がアルマリク城と想定される。もっと東だったとしても伊寧市内までであろう。中国語サイトでは、霍城（黄丸）付近としている。この城は何度か位置を変えているのかもしれない。翌日は例によって午前中早くに少しの移動であり、城にはほぼ一日滞在していたものと思われる。

図4 大池から山北の小城



移動方法

2日で100kmを越えているので、当然騎馬であろう。しかし、この光景を詠った真人の詩には、「双車上下して頓（漢文原文は敦）テン（手扁に真頁）に苦しみ、百騎前後して驚惶多し」や「車を懸け馬を束ね西の方山を下る」と車の利用が書かれている。人は乗らないにしても、車は引っ張っていたようだ。しかし牛にひかせると50km/dは出せない。空車を馬に引かせればそれだけの速度が出せるのだろうか。よく分からない。

ジャンバリク城からの日数

天山の北から4日掛かって9/27にアルマリク城到着なので、天山の北到着は9/23と逆算出来る。ジャンバリク城を9/7に出たとすると、17日かかったことになる。10日掛かって白骨甸に似た砂漠に取り着いているから、そこから天山の北まで7日となる。N.の5日を引いた2日が、白骨甸に似た砂漠を越した実際の日数であろう。

アルマリクからタラス（イリ）川渡河地点

城を出てから現在のカザフスタンに入り、ジャルケント、バスシ、サリオゼクの町を通り、ダム直前のシェンゲルディにでる。360kmだが、ダムの幅が20kmなので、半分を加えて370kmとする。これを4日だから、92.5km/dとなる。騎馬行以外に考えられないが、それにしても速い。優秀な馬に、土地と気候の良さが合わさった結果であろう。なお、イリ河の南岸を直行した方が近いように見えるが、恐らく良い道がないのだろう。

タラス川

岩村本の注にもあるが、現在のイリ川のことである。流れの方向の記述からも間違いはない。現在のキルギスの西北部にあるタラス川とは区別する必要がある。安部の書にも一節設けていくつかのタラス川について考察している。地図だけ見ていると、イリ川の南岸沿いに西に向かう方の距離が短くて有利に見えるが、川を渡るために北から大きく回り込んでいるのは、こちらの方の道路条件はるかに良いのだろう。川の途中は現在ダムが出来ていてカプシャ

ガイ貯水池となっている。池の南北にはかつて結ばれていたような道路が池に向かって伸びているの見える。

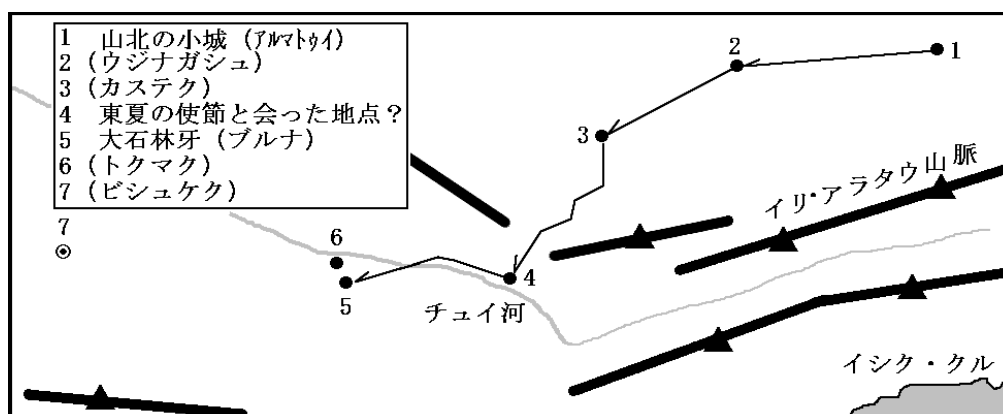
山北の小城

カザフ共和国のアルマトゥイであろう。非常に古い町である。南にイリ・アラタウ山脈が東西に走り、最高峰は 5,000m 近くあるので、一大山があったという描写に適う。イリ河から 76km あるので、そのまま騎馬行であれば 1 日、牛車であれば 3 日掛かる。イリ河を渡るのに 10/2 一杯掛かったとすれば、到着日は騎馬なら 10/3、牛車なら 10/5 となる。

2. 8 山北の小城から大石林牙

- V. また西行五日、劉仲録は一足先に出発した。
- W. 西に進む事七日にして西南の一山を越えた。東夏の使節に会した。
- X. 翌日大雪に遇う。ウイグル人の小城に至るころ雪は一尺に達したが日が出ると共に消えた。
- Y. 十六日、西南に板橋を渡って川を越し。晩に南山の麓に至った。ここは即ち大石林牙である。

図4 山北の小城から大石林牙



大石林牙

到着点の大石林牙は西遼即ちカラ・キタイの首都であった。始祖の耶律大石が大石林牙院に官職があったので、両方併せたような地名で漢人は呼んでいたようだ。一般にはクズオルドと呼ばれており、その前はベラサグンの名である。キルギスのトクマクの南にあるブルナの地にあった。アルマトゥイから大石林牙との間には山脈がある。記述のように、西南に向かう道がウジナガシュという町から始まり、山脈中のカステク村、43.08N75.99E を越えて続き、道路標示の途絶えた山中の 42.95N75.87E 付近にも大きな通行痕が確認できる。これを通して、チュイ川上にあるキルギス―カザフスタン国境線辺りから北に伸びる道と繋がっていたのではなかろうか。東夏の使節と会ったのが山から下って来て直ぐの 42.82N75.69E 付近で、雪で足止めを食ったのがもう少し西側であろう。そこから大石林牙まで 30km ある、前日の雪の影響もあって、出発が遅れ、到着が暮れ方になってしまったのだろう。

移動速度

山北の小城 10/2 川を渡っているのので、山北の小城着が、10/3 か 10/5 である。大石林牙着が 10/16 であるので、13 日か 11 日を要している。距離は 165km ほどなので、13km/d か

15km/d の速度になる。牛車行にしても遅すぎるのは、東夏の使節との会談、大雪による足止め等による停滞であろう。停滞した日数の判断ができないが、速度からして牛車であろう。

2. 9 牛車行と騎馬行

前章のチンカイ城まではずっと牛車行であったが、この経路では騎馬行をしばしば用いている。ただ、騎馬区間はまだ限定的で、平坦な草原地帯ではできるだけ牛車を用い、砂漠地帯や高低差の大きい所に限って馬を用いる傾向がみられる。チンカイ城までの五か月間の内に、真人一行全員が乗馬に習熟したものと思われる。騎馬の速度を見ると、高齢の長春真人でもモンゴル人と同じような速度を出しており、旅の当初、20km/d に満たない速度しか出せなかったことがウソのようである。七十歳を越えた長春真人の頑張りには驚く。

2. 10 まとめ

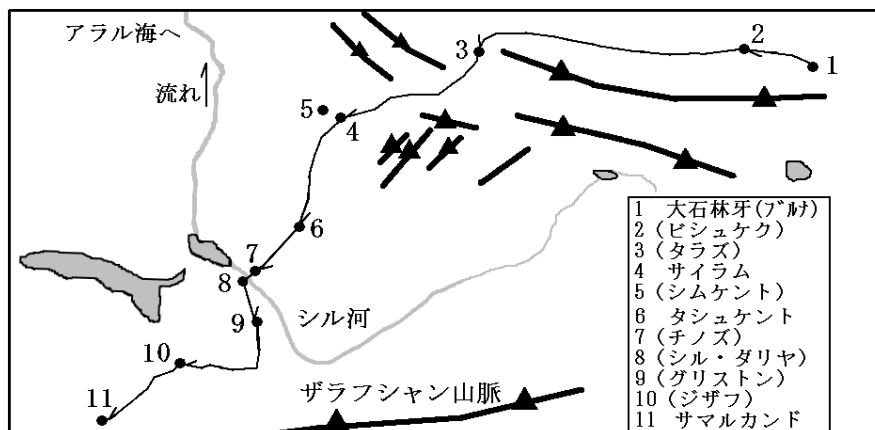
- ①アルタイ越えの部分は、総行程をざっと述べて、続けて詳しくその部分を記述する形式が数か所あった。地図上で二座の赤い山が見つかったので、実見できれば、推定の正しさを補強できる。
- ②西ウイグル国の首都として有名なベシュバリク城は、北庭古城という通説に反して、ウルムチであった。
- ③輪台とジャンバリク城は同一地の異名であった。ただし、三個の峰が突兀として天にそびえるのが見えたところを瑪納斯（マナス）県で確認する必要がある。
- ④アルマリク城は伊寧市西郊であり、中国文献の霍城ではないと考えられる。
- ⑤ジャンバリク城からサイリム湖の直前である天山の北に至る経路や日数がはっきりと判断出来なかった。近年の開発による地形変化を排除して考え直す必要がある。

第3章 チンギス・カンに会う

3. 1 大石林牙からサイラム城

- A. この地（大石林牙）でこれから先の道は難所が多いと聞いた。たまたま 1 台の車が壊れたので、これを放棄した。
- B. 十八日（十月）、山に沿って西に行き、七、八日にして、山がたちまち南に去ったところに一石城があった。その石の色はことごとく赤かった。そこには軍隊の駐屯した古跡があり、西には大なる冢が南斗星のように連なっていた。
- C. また石橋を渡り、西南に向かって山路を行くこと五日にしてサイラム城に着いた。そこには小塔があった。
- D. 十一月初め、毎日大雨が降った。四日、土地の者は新年として昼ごろ、賀を述べあっていた。虚静先生趙九古はその後数日にして病篤くついに逝去した。これは十一月五日であった。城外の東の原に葬った。

図1 大石林牙からサマルカンドへ



行程の概観

サイラムの町は、今もシムケントの東 14km 程の所にある。町の規模はシムケントより小さいが歴史の古さならはるかに勝り、小塔は今も残る。ここへの道は障害が多いとある。地図で見ると、サイラムからタラス方向に山の嶺を三つほど越えなければいけない。この部分のことであろうか。

一石城

山がたちまち南に去った、との表現に適うのは、カザフスタンのタラス (Taraz) である。タラス (Talas) はキルギスにある別の町である。大石林牙の南に東西に走る山脈があり、それに沿って西に進んで来た。タラスで一旦山並みが途切れると、南に更に高い山脈が見えるので、たちまち山が南に去った、と表現したのでだろう。岩村本には、その土地の色が赤いと書かれているが、原文は、「一石城當途石色盡赤」であり、城の石が赤いのである。インドの有名な赤い城のような感じであろうか。タラスの土地も近くの岩山も赤黒いような色である。石橋はタラス河に架かっていたのだらう。現在、橋や城跡があればどうなっているのか興味深い。西に大きな塚がたくさんあるのも地点決定の証拠になるが情報が得られない。ここを西南に進めば、山脈の東の端を少し横切るので、それが C.に言う山路だろう。

大石林牙からタラズまでの距離と速度

距離は 340km あり、7、8 日掛かっている。7 日なら 49km/d、8 日なら 43km である。車を 1 台放棄したと書いているから、牛車行を諦めたようである。少し遅いのは道が悪かったためか、あるいは虚静先生の体調のせいかな。

タラズからサイラムまでの距離と速度

距離は 166km である。5 日かかっているが、例によって城主に歓待されているので、町にはかなり早く到着しただろう。実質 4.2 日とすれば、39km/d になるが、それでも遅い。サイラムで虚静先生が亡くなっていることを思うと、先生の調子が良くなく、負担がかからないように速度を落としていた可能性が高い。

3. 2 サイラムからホージェント・ムレン

- E. ただちに南に進み、また三日にしてある城に着いた。
- F. 翌日また一城に着き、更に行くこと三日にして川に至ったが、それは、
ホージェント・ムレンであった。浮き橋によってわたり、西岸に宿した。
- G. 河の西南にはまったく水と草のない地が二百里続いているので夜行した。
- H. また南に進み、西に大雪山を望んだ。山並みはサマルカンドの南の山峰と相連なっている。
- I. また一城に着いて水と草を得、さらに一城を経たが、ウイグルの長が遠く郊外に迎え、城南において食事を供し葡萄酒を献じ、且つ小児の軽業剣舞を演じせしめた。
- J. 更に二城を経て山道を行くこと半日にして、平地を南北に流れている河に至った。
- K. 仲冬十八日大河を過ぎサマルカンド大城の北に至った。サマルカンド守備を任された耶律阿海以下が歓迎のために郊外で待っていた。

ホージェント・ムレン

岩村本の原注にあるようにシル・ダリヤ（シル河）である。ただ、この名に定着したのは 18 世紀からとのことであり、国によって色々な呼ばれ方をしていたようだ。現在ホージェントの名で知られている町はタジキスタン国であり、紀元前からの歴史を持つ古く大きい町である。この町の側を河が流れているので、この名で呼ばれていたのだろう。サマルカンドに向かうための渡河地点は、現在のチノズ（Chinoz）であろう。

距離と速度

11/6 サイラムを出発したとする。7 日間で河に着いているから、シル・ダリヤ着は 11/12 である。距離は 195km で、速度が 28km/d となるので牛車行である。

河までの二城

最初の 3 日で城に着き、翌日また一城に着いている。移動距離はそれぞれ 84km と 112km 地点と計算される。だが、この辺りは小さい町が多くて特定するのが難しい。112km 地点はタシュケント市の北部地域かもしれない。

サマルカンドに向かう

チノズから浮き橋によりシル河を越えた地点には、現在その名もシル・ダリヤという町になっている。ここを起点として、西南 200 里の地は水と草がないとある。地図ではサマルカンドに山越えて向かう入り口の町、ジザフへ直行する方向のことである。そこまで 110km なので距離は記述に一致する。現在は薄い緑に覆われているが、ここは 19 世紀の終わり頃

まで飢餓草原と呼ばれた沙漠であった。シル河の途中や西に見える湖も土地改良で出来た湖で昔からあるものではない。中流で水を取り過ぎたために、下流のアラル海が干上がって深刻な環境破壊になっているのは有名である。ジザフに向かう経路は 2 つ考えられる。1 つはシル河沿いに行く道である。町が多く水も豊富だが、河の蛇行と農地が多いせいで通行しにくいだろう。すると、H.は G.の進路の言い替えである。沙漠の縁にあるグリストン(Guliston)を通る経路を取ったのではないか。南に見える大雪山はザラフシャン山脈に違いない。

シル河からの城

城を何箇所か過ぎていますが、特徴が書かれていないので特定が難しい。だが、I.に書かれている最初の城は、シル・ダリヤから 48km あるグリストンであろう。砂漠地帯の東の端なので、水と草がある程度補給出来るのだらう。次が 30km 進んだホボス(Hovos)付近であろう。夜行の後、水も草も多い地帯に着いたので、安心して半日ほどの接待を受けている。ここからサマルカンドまでの宿泊地点の中で、平地を河が南北に流れているという J.の地点は推定が付く。それはガラオロル(Gallaorol)、40.02N67.59E である。ガラオロルまでに 2 城過ぎたのは、1 つがホボスから 60km 地点のザブダルで、もう一つはジザフであろう。ジザフは宿泊せずに通り過ぎて、その日の内にガラオロルに着いたのだらう。東から来て、ジザフの町から川沿いに山地を進んでガラオロルまで 25km の距離がある。それを半日と言っているのも、一日 50km ほどの速度になる。

サマルカンドへ

ガラオロルで宿泊し、次の日は 56km 進んだジョンボイ(Jomboy)泊りになるだらう。サマルカンドの直ぐ東である。旧市街は現在の町の北方である。城の中の丘に耶律阿海が住んでいたという表現が本文にあり、その丘が見える。これからすると、一行は町の一番北、現在の飛行場のあたりに到着したかと思われる。ジョンボイから 10km である。

日程

11/13 にシル・ダリヤ発で、18 日にサマルカンド到着の 6 日間である。到着日は即ち大歓迎会なので、いつものように午前中早くに到着しただらう。実質 5.2 日ほどである。前日の宿泊地はサマルカンドに隣り合ったジョンボイ(Jomboy)の町に間違いない。出発からサマルカンドまで 260km ほどなので、平均 50km/d となり騎馬行である。

距離と日数のまとめ

大石林牙からタラズまで距離は 340km ある。7、8 日掛かっているのも、7 日なら 49km/d、8 日なら 43km である。騎馬行であるが少し遅いのは道が悪かったためか、あるいは虚静先生の体調のせいかな。タラズからサイラムまで距離は 165km である。5 日かかっているが、城主に歓待されているので、実質 4.2 日とすれば、39km/d になる。前の行程より速度が更に落ちているのは、虚静先生の調子がますます悪くなったためだらう。11/6 サイラムを出て、7 日間で河に着いている。距離は 195km である。速度が 28km/d となるので牛車行である。舟橋があったので渡河日数は見ないで良く、シル・ダリヤ着は 11/12 である。

シル・ダリヤを夜に出発 11/13→グリストン着 11/14→(以下昼行)ホボス付近着 11/14→ザブダル着 11/15→ジザフを経てガラオロル着 11/16→ジョンボイ着 11/17→にサマルカンド到着 11/18 になるであらう。6 日の行程で距離は 260km である。ただし、6 日目は 10km 程しか移動していないし、I.でも半日ほど費やしていると思われるので、5 日以下と思われる。ざっと 4.5 日と見ると、速度は、58km/d となる。アルマリク城を出た時に比べて速度が落ちているのは、虚静先生の死因にも関係しているのかも知れない。

3. 3 冬を越す

サマルカンドに着いて、城主耶律阿海などの大歓迎を受ける。旅を案内していた劉仲録は先行して城に着いており、「これから千里の先に大河があり、舟橋を架けていたが賊に破壊された。冬の最中であるし来春を待って皇帝に謁見した方が良い」との情報をもたらした。それに従って冬をサマルカンドで過ごす事になった。閏 12 月を過ぎようとする頃、先に出していた劉仲録の偵察隊が帰って来て、「壊されていた舟橋は第二子ジャガタイが修復し賊を滅亡させた」と告げた。さらに、ジャガタイが言うには、「皇帝は大雪山（ヒンズークシ山脈）の東南に駐屯し、今は雪が山の入り口を百余里もとざし行くことができない。ここは行在への道に当たっているから、自分のもとへ師をお連れして来なさい」とのこと。真人は、ここから先千里は米麦蔬菜が手に入らないと聞いていることを理由に、サマルカンドを離れるのを断った。

冬が過ぎ春を迎えた。現地の自然の美しさを漢人一同と共に真人たちは満喫する。

三月上旬、行宮から帰って来た阿里鮮（河西の人）が道程を語った。「春正月十三日、ここを發して駆けること三日で東南に鉄門を過ぎ、また五日にして大河を横切り、二月一日東南の大雪山を過ぎた。積雪はなはだ深かった。そこから南に三日で行宮に至った。数日滞在して帰って来た」。これを聞き真人は腰を上げた。

3. 4 アム河を渡る

- L. 三月十五日、行を發し、四日目にケシュを過ぎた。万戸ボウルチュがウイグル兵千騎を率いて護衛した。
- M. 鉄門を過ぎ東南行して山を越えたが、山は高大で石が縦横に散乱していた。兵士は車を挽き、進む事二日にして山前に達し、流れに沿うて南行した。ここで軍は北に進んで賊を掃討した。
- N. 五日にして小さい川に至りを舟で渡った。その兩岸には木が多かった。
- O. 七日目には舟で大河を渡った。河はアム・ムレンであった。

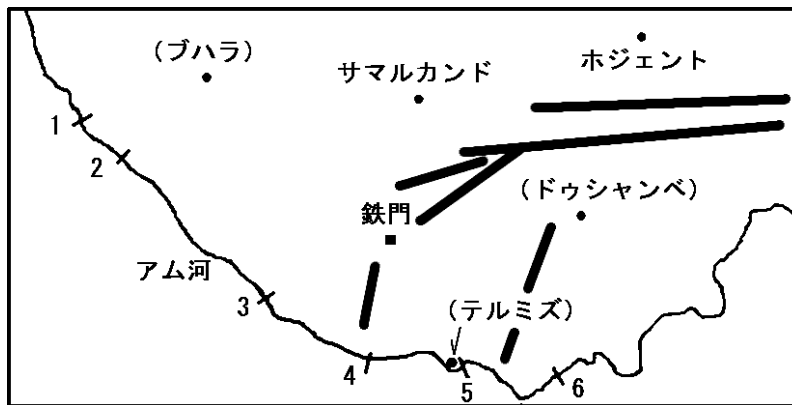
出発

真人が門人 3 名を館に残し、五、六名の弟子たちを連れて道案内人と共に出発したのは三月十五日（1222 年）である。出発から四日でケシュを過ぎた。関口図などによれば、ケシュは現在のシャフリサブズ（Shahrisabz）であり、サマルカンドから現在の街道沿いに 85km ほど南にある。そこを過ぎた地点とあるので現在の地図を見ると、15km ほど南にヤッカボグ（Yakkabog）がある。関口図にもヤッカ・サライの名が見える。そのあたりで宿泊したと推定するとほぼ 100km である。一日当たりの進行速度は 25km/d となり、牛車で移動していると考えられる。到着日は 3/18 となる。ここから、かのボウルチュがウイグル兵 1,000 騎を率いて付き添ったのだから、大変な警護振りである。

鉄門の位置

鉄門は、サマルカンドからバルフ方面に抜ける古代の重要な隘路にあり、鉄で補強した門があったのでその名がついたという。関口の図ではウズベキスタン山中の 38.16N67.11E 付近、東のバイソン（Boysun）と、西のデルベント（Derbent）の村の間あたりにある。

図2 アム河渡河地点



アム河を渡る

ヤッカボグからの経路を考えたいが、想定が難しいので、先にどこで河を渡ったかを考える。アム河は、川幅が 1km を越える所のある大河である。数人ならともかく、多くの人が渡れる地点は決まっていただろう。重要な街道の延長上にあつて、舟は勿論、舟大工、船頭がおり河宿などがあつたはずだ。そんな重要地点は昔も今も変わっていないだろう。そこには現在は橋が架かっているのではなかろうかと考え、上流から下流まで見て行くと、橋は 5 つあつた。2 つはブハラの西南にあり、鉄道橋もある。この二本は中近東に繋がる幹線道路であり、今回の検討には関係ないだろう。3 つ目は 37.84N65.23E にあり、ケルキと表示されているが英文は *Atamurat* となっている町にある。ここもちょっと離れている。4 つ目は 37.35N66.26E にあつて、ケリフ (Kelif) という町の近くにある。道路橋ではなくパイプラインを渡す橋のように見える。この村には小さいながら河港のようなものが見える。近くに大きな町はないが、対岸にバルフの町に向かう道があるので、渡河点として重要だったのだろう。5 つ目はテルミズ (Termiz) という大きな町の東郊にある。テルミズは河港もある大きな町で、アム河交通上の重要な町のように見える。6 つ目の渡河点はテルミズの 115km ほど東 37.19N68.60E 地点で道路標示が兩岸を結んでおり、橋はない。フェリーで結んでいるものかと思うが、港らしきものは見えない。

5 番目と 6 番目は、ここから北に進むと 2 本の道ともドウシャンベの町に達する。南に進むとカブールを経てインドに向かう道に続く。現在はどうか知らないが、昔は重要な交通路だったのに違いない。そして、どの橋も川幅が 500m ほどに狭まった地点で、流れが複雑でなさそうな所にある。渡河地点はこれらが候補になる。

一行の進路は鉄門を東南に越えてからアム河を渡るので、渡河地点はテルミズの可能性が高い。また真人一行は来た時と違った道で、大山を越えてサマルカンドへ帰還したと言う。4 のケリフ経由では北方の雪山に向かえないので、帰り道は 6 の地点で河を渡ったのではないだろうか。そのまま北に向かうと、自然とドウシャンベを経てケシュの東に伸びる山脈、即ちザラフシャン山脈に向かう。これを越えると溪谷が西に伸び、サマルカンドに至る。こうして見ると、行在の場所は、テルミズと第 6 地点から南に伸ばした線が、どこかで交わった所で、そう遠くない所にあるはずである。

図2 ケシュからアム河



鉄門関はどこか

以上のような考えのもとに、M.、N.、O.の文章を、図2で鉄門付近の地形と照らし合わせたが理解ができない。鉄門を越えると山勢高大どころかむしろ山を越えてなだらかになっている。山を越えたから、前山に着いたと言っているのであろうが、上図を見てもどの地点なのか見当がつかない。なおもよく見ると、本書の鉄門というのは本来の地点ではなく、グザル (Guzor、38.61N66.26E) のことを言っているとしか思えない。そこから東南に道が山の中に伸びていて、正に山は高大の地形である。坂道が続くので兵が車を牽いたであろう。石が多いかどうかまでは分からない。鉄門をグザルと考える理由は、元史の太祖十六年、「夏四月駐蹕鐵門關」とある記事にも拠る。チンギス・カンが本来の鉄門がある山の上の不便で狭い所に駐屯したとは思えないので、グザルと考えるのがふさわしい。鉄門に至る道が始まる所として、グザルを鉄門関あるいは鉄門と呼んでいたとしか思えない。これは当時のモンゴル人や漢人の勘違いというより、本国で何々関と呼ぶ地形が山岳部の登り口に多いので、グザルの地形をそのように感じたものであろう。このように解釈しないと鉄門関が理解できない。次に前山に出たとあるのは、山の一番高い所を越えた意味であろう。とするとデルベントがそれに合致する。村の中に南に向かって小さい河も流れており、それに沿って道も続いている。北に向かっての山道もあるので、軍が北の山に入って賊を破った、の記述にも適っている。ここまで2日で至ったと言うのだから、既にサマルカンド基準ではなく、鉄門関即ちグザル基準の日数である。95km あるので、進行速度は 48km/d となる。ケシュを過ぎた地点で騎馬兵が警護に付いているので、真人一行も以後は騎馬行であったのであろう。とすると、ヤッカボグからグザルまでも騎馬であろう。距離は 58km であるし、平地なので一日の距離と考えて良い。

小河とアム河

前山であるデルベントからバイスンを経て道形に進むと。シュルチ (Shurchi) の南の辺りで平野に出る。大きな人造湖の北である。流れているのはスルハン河 (Surkhan darya) で、巾は広い所で 200m、狭い所でも 100m ほどはある。水量が多いようなので、舟でしか渡れないだろう。五日で小河に着いた、とある地点に違いない。小河とあるが、舟で渡るの

だからそれほど小さくもない。次に出て来るシル河やアム河に比べれば小さいくらいの意味であろう。前山からここまで 89km ある。3 日掛かっているが、山道ではあっても下りなので、2 日で余るほどの距離である。北に入って賊を討ったことと、河を渡ることによって 1.5 日ほど費やしたのだろう。道形にアム河方面に向かうとテルミズ (Termiz) に着く。小河の渡河地点より 95km あり、騎馬で 1 日半の距離である。アム河は巾が広い所で 1km、狭い所でも 500m はある大河である。渡河には恐らく翌日丸 1 日要したのではなかろうか。

行程のまとめ

サマルカンド発 3/15→4 日 (牛車) →ヤッカボク着 3/18→1 日 (以降騎馬) →グザル着 3/19→2 日→前山(デルベント)→3 日→小河渡河地点→2 日→テルミズ着 3/2 日→1 日→渡河 3/27

3. 5 チンギス・カンの行在に至る

- P. そこから東南に道を取り、夜になって古い運河のかたわらに宿したが、そのあたりには蘆が繁茂し、一面に地を覆っていた。
- Q. 少しく南に進んだが、山中に大なる実心竹が生じ、士卒はこれを採って戟 (槍のようなもの) を作った。時に三月二十九日であった。
- R. さらに四日にして行在に着いた。皇帝はカラホトを出迎えさせた。時に四月五日であった。
- S. … (この間チンギス・カンとの会談の様子) …。そこで別の道によって還り、大山を経たが、その山には石門があった。…流れははなはだ急で、ある騎士が驢馬に鞭うって渡らせようとしたが、その驢馬は溺死してしまった。…この地は関所であったが、蒙古兵に破られたのである。
- T. はじめ師が三月の末に来たときには草木繁茂し羊と馬はみな越えていたが、詔に従って帰ったのは四月の終わりで、百草すでにことごとく枯れていた。
- U. 毎日宵の涼しい時に乗じて進んだ。五、六日にしてふたたびサマルカンドに達し、諸官人の出迎えを受けて館にはいった。時に即ち重五の日 (五月五日) であった。

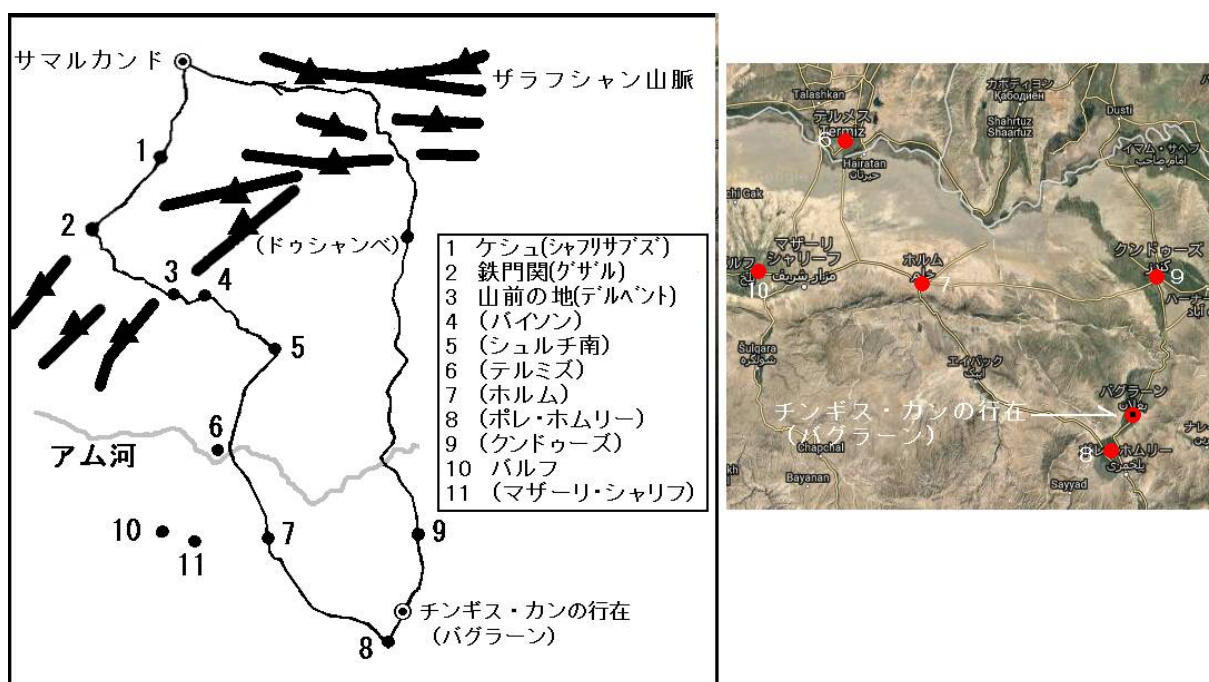
古い運河の傍ら

東南に向かって出発したのは渡河の翌日 3 月 28 日であろう。夕方になって古い運河の傍らに泊っている。蘆が生い茂っていたというこの地点をテルミズの対岸に探ると、ホルムの村 36.70N67.70E があった。水路でできたと思われる特有の構造や、この辺りでは他のどこよりも緑の濃いことが記述に一致している。他にふさわしい場所はない。テルミズの対岸から 66km あるので、それまでの移動距離より 10km ほど長い。夕方についたという理由であろう。

少し南下した所

前日の到着が遅かったせいか、少しだけ進んだとある。それでも時間が余っていたのか詩を作っているが、地点を暗示するような語句は無い。付近の山に実心竹という植物が生えていて武器になるようだが、何なのか分からない。青黒い大きなトカゲもいるが地点の判断の参考にならない。しかし、ホルムより少し南の街道で、緑が多く平地のある所は一ヶ所しかなかった。ホルムから 17km 進んだサイヤド (Sayyad) の村で、36.59N67.77E である。ここが 3 月 29 日の宿泊場所であろう。

図3 サマルカンドからチンギス・カンの行在への往復路



行在まで

サイヤドから4日で行在に達したのだから、行在に着いたのは4月3日となる。カラホトという大臣が一行を迎えに来たのが4月5日である。1日ほど間を置いて迎えが来ている。これは先ず真人に同行して来た重臣たちとの占領地情勢についての会議が優先されたものと思われる。田鎮海はアルタイ地方から同行していたし、真人を警護したボウルチュもいた可能性がある。同行してきた鎮海は真人一行に先んじて到着し、征服地の動静や運営についての会議をおこなったのだろう。その為に、真人たちが待たされた可能性がある。一行の進行速度が遅めであるのは、細い山道を順に行くために隊列が長くなったからかも知れない。

サイヤドから4日行程の所に行在があるが、山岳部なので50km/dの速度とすると200km以内にあるはずである。多くの人と牛馬を養える平原を探すと数は多くない。カブールの北のバグラム盆地が目につくが、距離が250kmと遠く、北をヒンドークシ山脈で塞がれて、友軍から孤立したような形になるので候補にはなりえない。サイヤドから街道を南下して行くと、エイバックの村で代表される緑の濃い村々を経由してボレ・ホムリー(Pol-e Khomri)という町のある草原に達する。山に囲まれた盆地平原であり、クンドゥーズ(Kunduz)河が中央を流れる。河は北流して山のくびれを抜けると、再びバグラーン(Baghlan)という盆地平原を流れ、更に狭い峡谷を抜けて北に向かいクンドゥーズの平野を抜けてアム河に合流する。これら三つの盆地平原はクンドゥーズ河の水に恵まれ緑が濃く、山に囲まれた要害の地である。この辺りが行在のあった場所と考えて間違いないだろう。これを裏付ける二つの記事がある。一つは先と同じく元史の太祖十六年の記事で、秋帝攻班勒紇等城とある。班勒紇は現在のバルフである。秋にバルフを攻めた後、その近くで冬に兵と牛馬を養える緑の多い平原を求めればこの辺りになろう。更に集史では、ジェラル・ウディーンを掃討したことに触れた後に、チンギス・カンバグラーン地区に夏営地を定め大行李も残していた、との記事がある。大行李を残していたのは地形が保管に適していると判断したからであろう。バグラーン盆地を見ると、東西を山に囲まれ、河の流路である南北だけがわずかにボレ・ホムリー盆地とクンドゥーズ平野に開いており、極めて守りやすい地形である。東の小さな山

脈はヒンズークシ山脈から吹き下ろす風を防いでいる。発達した扇状地があり、家畜の飼養にまことに良さそうである。広いクンドゥーズ川が流れ水の心配もない。まことに行在の場所にふさわしく、通年の根拠地にしていたのだろう。現在の町の中心部から 10km ほど北に、小さな川から広がった扇状地があり、放牧に良さそうである。全くの想像だが、小高いこの辺りにチンギス・カンが行在を設けていたのではなかろうか。サイヤドからの距離はボレ・ホムリー草原を経てバグラーンまで 120km ある。山道であっても普通なら 3 日ほどしかかからない。4 日掛かっているのは、道が細いので、重臣たちを先に通すために時間調整していたのかも知れない。本稿は、バグラーン盆地にチンギス・カンが行在があり、ここで長春真人とチンギス・カンの最初の会談が行われたと結論する。

3. 6 チンギス・カンとの会談

四月五日、長春真人はチンギス・カンに謁見した。チンギス・カンは言った。「他国の人を何人か招聘したが誰も来なかった。真人一人、萬里の道を越えて来た。非常にうれしい」。真人は答えた。「これは天のしからしむところであります」。次いで、「真人が遠くから来たからには、何か長生きの薬を持って来たのではないか。あれば私に与えよ」と言った。真人は直ちに答えた。「衛生の道はありますが、長生きの薬はありません」。チンギス・カンは率直なその答えを受け入れた。このようにして、最初の会談が終わり、四月十四日、改めて詳しく道教の法理を語ろうとした。ちょうどその折、賊の反乱が勃発し、チンギス・カンが親征することになった。征討に時間がかかるとみなされたので、半年後の十月の良き日に改めた。真人は秋までの長い期間この地に留まることを好まなかったのも、一度サマルカンドに戻っていたいと告げた。チンギス・カンは再度ここまで来るのが大変ではないかと言ったが、「二十日あればまた来る事が出来る」と答え、来る時とは別の道をたどって帰ることになった。

行程のまとめ

3/28 テルミズ対岸を出発→1 日（騎馬）→ホルム着→3/29 サイヤド着→4 日（騎馬）→4/3 行在着→4/5 会談

3. 7 サマルカンドへ帰還する

- X. そこで別の道によって還り、大山を経たが、その山には石門があり、これを望めばあたかも蟬を削ったごとくで、その上には巨石が横たわり、橋の如くであった。流れははなはだ急で、ある騎士が驢馬に鞭打ってわたらせようとしたが、溺死してしまった。その水辺にはなお死体が多かった。この地は関所であったが、近ごろ蒙古兵に破られたのである。
- Y. 五、六日にしてふたたびサマルカンドに達し、諸官人の出迎えを受けて館に入った。時にすなわち重五の日（五月五日）であった。

サマルカンドへの帰還路

来た道と違ふとあるだけで、地点の情報らしいものは。大山を経たのと急流があった事だけである。五、六日にしてとあるが、起点がどこか分らない。何日に行在を出発したかも分らないが、二十日で来られると言っているのも、帰りもそのくらいだろう。五月五日から逆算すると、会談が予定されていた四月十四日を少し過ぎたくらいに帰途についたのではなかろうか。先にアム河の渡しで述べたように、6 つ目の地点でアム河を渡って帰ったと考

えるのが妥当である。そこから道形に北に進み、現在のドゥシャンベを経て、立ちはだかるザラフシャン山脈を越えたのであろう。山脈横断の道もちやんと存在する。それを越えて溪谷を西に下ればサマルカンドの東に出る。往復の道を図に示す。なお、ドゥシャンベからサマルカンドまで 260km ほどである。図のように険しい山岳路を経由するので速度を騎馬行で 45km/d とすると 5.8 日となるので、五、六日にして、とはドゥシャンベからの日数と考えられる。

3. 8 まとめ

- ①大石林牙からサイラム到着まで騎馬行の速度が以前より低下している。タラズまでは地形の影響かもしれないが、その後は虚静先生の体調悪化によるものだろう。先生は何とかサイラム城に到着して身体を横にしたものの 4 日後逝去し、一行の中でただ一人漢土に戻れなかった。同行の仲間は勿論、長春真人の気持ちはどんなだったであろうか。
- ②鉄門関の言葉は、グザルを指す場合とバイスン西を指す場合がある。漢土で関が設けられる地理的条件と、これから鉄門に向かう山の登り口であるから、グザルが鉄門関と呼ばれたのだろう。
- ③チンギス・カンの登位 16 年の冬から行在を設けていたのは、バグラーンの町がある盆地平野である。西域に展開するモンゴル軍の最前線近くにいたのである。
- ④帰路は北のクンドゥーズを経てアム河を渡り、ドゥシャンベを経て、ザラフシャン山脈を越えたものと思われる。

第4章 シル河の行在

4. 1 サマルカンドに帰還

真人はサマルカンドに帰った。訪れる者も少なく、夏をゆっくりと過ごす。八月、次の訪問時期の内合わせに行っていた使者が七日に帰って来て、チンギス・カンの意向を告げたので行在に向かって出発することになった。

4. 2 再びチンギス・カンの行在へ

- A. 八月八日に出発した。大師（耶律阿海）は数十里まで見送ってくれた。……。十二日ケシュ城を過ぎた。十三日には護衛の歩卒千人、騎馬兵三百を伴って大山の中に入った。これは鉄門関とは別個の道である。
- B. 赤い水の澗を涉った。高さ数里の俊峰がそびえていた。谷の東南を行くと麓に塩泉が流れていた。また、東南の分水嶺に登って西を眺めると、高い溪谷を氷が覆っているようであったが、じつはそれは塩であった。山上の紅塩は石の如くであった。
- C. 十四日鉄門関の西南の麓に着いた。その山を出ようとする所にある山門は峻険で左の崖が崩れており、水は地下を一里ばかり伏流している。
- D. 翌日、中秋の日、川（アム川）のほとりに着いたが、その水勢は黄河の流れのごとくで、西北に向かって流れている。舟に乗じてこれを渡り、南岸に宿した。その西に山寨があり、団八刺（不詳）といい、山勢険固である。
- E. 川をさかのぼって東南に行くこと三十里の間は水なく、夜行した。バルク城を過ぎたがこの城ははなはだ大きい。
- F. 黎明に食事を終わり、東に行くこと数十里にして北に流れる水流に行き当たり、馬でようやく渡るを得て、その東岸に宿った。
- G. 二十二日には田鎮海の出迎えるに会し、共に行宮に至った。

鉄門

A.とC.に2回鉄門関が出て来るが、鉄門関と別の山の中の道を進んで、また鉄門関の西南に出ている。明らかに二つの意味は異なる。最初は以前指摘したグザルで、二番目は本来の鉄門、38.16N67.11E 付近を意味しているだろう。

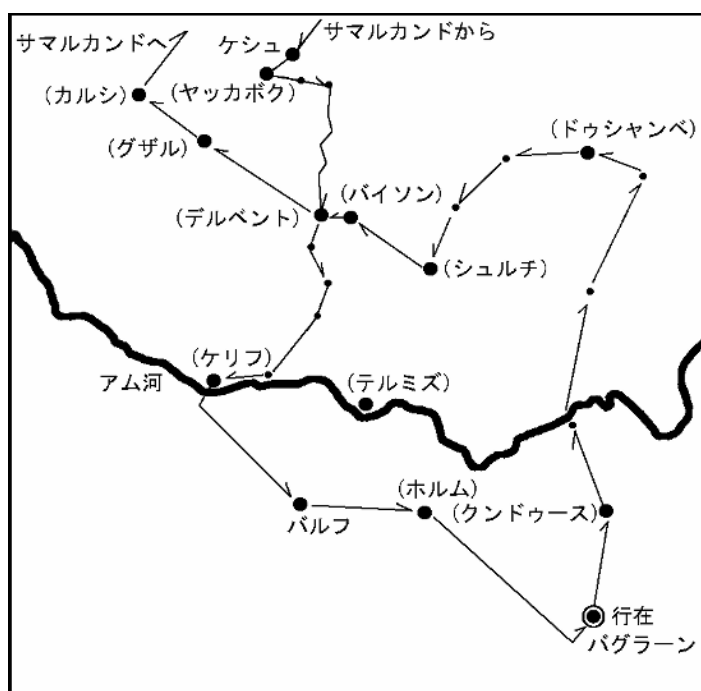
バルク城

現在バルフと呼ばれている町であるから、D.の川もアム川である。

渡河点

バルクに向かって川をさかのぼるように東南に進んだのだから、渡河点は橋のある地点で指摘した4番目のケリフに違いない。この推測を補強するのが、川が西北に流れていることと、団八刺という堅固な山寨が西にあるという記述である。川を渡ると岩山があり、現在ここに、パイプラインを通して見える吊り橋がある。高さは川面から10m以上はあるように思える。川の動きや対岸を見張ることが出来るこの岩山に城塞があったのだろう。37.34N66.24E 地点である。現在はKeleftと表記されているが、関口の地図にはダグラ・アローサの名が併記されている。これが団八刺と表されたのだろう。

図1 二度目の行在行きとサマルカンドへの帰還路



北に流れる水流

バルフから東に進むと、現在はバルフよりずっと大きいマザーリシャリーフの町につく。町の中心から 4km ほど東に北流している川がある。バルフから 23km ほどなので、数十里にて水流に行きあたったという記述に一致する。

ケリフまでの日数

8/13 に大山に入って以前と別の道を通り、ケリフ着が 8/15 となっている。わずか 3 日の走破となっている。以前にグザルから鉄門関経由で進んだ時はアム川に出るまでに、ざっと 270km、7 日掛かっているのである。これが本当に 3 日なら、90km/d で駆け抜けたことになる。以前の道でさえ 50km/d 程度であったのだから、山の中で平地のような速度が出るはずがない。どこかに重大な誤りがある。

出発からの速度を見ると、8/8 サマルカンド発で 8/12 にケシュを過ぎたとなっている。以前のとおりにヤッカボクで宿したと考えれば、100km ほどの足らずの距離である。これを 5 日間だから速度が 20km/d となって牛車にしても遅すぎる。一方、A.には阿海が数十里即ち 25km ほど送って来たとある。見送れば帰るのだから、その距離はどんなに長くても半日行程である。数十里が正しいければ、真人は百里ほどを進んでいるはずで、50km/d 以上の速度とならなければおかしい。騎馬行であるから、ヤッカボクまで 2 日で達するはずである。そのように考え直すと、8/9 にヤッカボクに到着で、8/10 より大山に入り、8/15 にケリフ着の 6 日間が、大山を踏破していた日数と考えられる。以前の日数が 7 日であり、1 日くらいは短縮できそうなので、これなら妥当と言えよう。原文を改めてしまう事になるが、大師が見送って来た距離が正しかったとすれば、このような解釈になる。

ケリフから行在までの日数

8/15 にケリフ着なので、渡ったのが 8/16。そのまま夜通し進んでマザーリシャリーフに宿泊したのが 8/17。翌日、東に 50km ほど進めば、以前滞在したホルムに 8/18 着である。ここから 4 日で行在まで行けるので、鎮海が迎えにきたと言う 8/22 にキッチリ合う。アム河を渡ってからの日程に問題はない。

ケシュを過ぎた地点からケリフまで

以前と違う地点から山に入ったとあるが、東の山地に入る谷の入り口はケシュからグザルまでに 6 か所ほどある。どの谷も、20 数 km 奥まで村が続いている。北の 2 本は高山で行き止まりになっているように見える。南の 3 本はグザルに近く、別の道を通る意味が薄いので、ヤッカボクの東方の谷から入ったのではなかろうか。ヤッカボクから 20km ほど進むと二方向に分かれるが、大きいほうの谷へと真っ直ぐ進んだと考える。道形に進んで、N38.78、E67.12 で南に向かい、Zarmas という村に出る。その辺の土地一帯は赤いので、赤い水の潤とはここかとも思うが、土地の色が赤いのはここだけではなく、赤い何とかという地名もいくつかあるので決め付けるわけにはいかない。更に南下して 38.73N67.12E 辺りに見える道を通り、38.65N67.13E 付近の谷に出る。その辺りの地面は白いが、西の方は更に白い部分が目立つので、この辺りが B. のことではないかと思われる。そこから先には、谷に細長く伸びる村落がとぎれとぎれに南へ続いているので、38.67N67.11E、38.45N67.04E 付近を通過してデルベントに出て来たのではなかろうかと思う。だが、明瞭な道路も通行痕も見えない地点が何箇所もあるので、単なる想像に留まる。前回行在に向かった時、デルベントから軍が北に向かったとある。それを反対方向からに進んだのが、今回真人一行がたどった道であろう。

鉄門の西南の地

C. の、デルベントを越えて山門があった所とは、38.16N67.05E の Daganadzam 村付近ではなかろうか。関口の図で関所がある地点はザハナと表記されている。Dagana のことではなかろうか。一行の左方向即ち東には険しそうな赤い岩山が迫っているので、この南に関があったのではなかろうか。河跡は明瞭だが水の流れがあるようには見えないので、伏流しているのかも知れない。

ケリフまで

鉄門の西南を過ぎてからは現在の道筋に従って南下しただろう。平野部に出てからはアム河の流れに沿ってケリフまで行ったのではなかろうか。この行程で川の流れ方向の意識が強くなっていた為、E. では既に河を離れ内陸部に向かっているのに、川を遡ってと書いたのではないかと想像する。

ここまでの走破距離

道筋がはっきりしないので大まかな数字であるが、ヤッカボクからケリフまで 300km とする。6 日で走破したのだから 50km/d の速度となる。

4. 3 サマルカンドに還る

- H. 二十七日（八月）、皇帝は北に向かわれ、途中、師に対ししばしば葡萄酒、瓜、蔬菜を賜った。
- I. 九月一日、舟橋を渡って北行した。師が道を説く期がせまってきたので、太師阿海を呼び寄せられるように申し上げた。
- J. その月の十五日（陽暦十月一日）、帝は立派な幄を設けられ、……、ただ闍里必鎮海、宣差劉仲録が室の外に侍った。師と太師阿海と阿里鮮の身が帳の中に侍った。師は奏して、……、外の二人も帳中に召しいれた。帝は師の説くところを、太師阿海をして蒙古語に訳して奏せしめ、すこぶる満足せられた。
- K. 十九日の夜、再び師を召して道を論ぜしめ、帝はいたく喜ばれた。

- L. 二十三日、また師を幄によび迎えられ、初めの通りに礼を行い、帝は始終温顔をもって師の説くところを聴かれ、侍者をして記録せしめ、且つ勅して漢字をもって誌さしめた。
- M. ついで車駕が東におもむかれるのに扈從しつつ、途中しばしば道を講ぜられた。
- N. さらに数日にしてサマルカンド城の西南三十里の地に至った。十月一日（陽暦十一月五日）師は奏して城内の旧居に帰ることを願われたので、帝はこれを許された。帝は城の東 20 里のところに駐蹕された。この月の六日、太師阿海と共に帝に謁した。

舟橋の地点と移動手段

行在推定地のバグラーンから北に向かった後に舟橋を渡っているのだから、この橋の地点は、以前真人が帰路に用いた渡河地点である。雪解け水と夏のモンスーンの影響で水位が不安定だったアム河も秋になって水位が落ち着き、かつチンギス・カンが渡るので舟橋が架けられたのだろう。渡河点までバグラーンから 135km あり、27 日から 9 月 1 日までを 5 日間の移動と考えると 27km/d で、牛車の速度である。m.でも、車駕が東におもむく、とあるし、一月以上掛かってサマルカンド着だから、全行程牛車であろう。

経路の推定

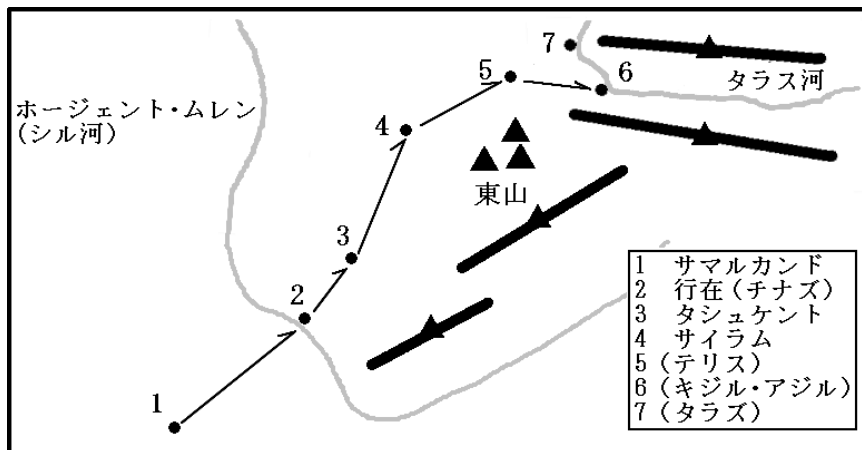
どこを経由したのか全く分からないが、最後は東に向かう車駕について行って、サマルカンドの西南に到着したとある。真人の講話を何度か聞きながらの旅で、急いでいる様子がない。行在の地に一年いてインド征服への道を探っていたが、地理的に困難であることが分かって断念したのであろう。征服事業をひとまず終えて、息子や部下たちが征服した土地をゆっくり巡幸しながらの旅ではなかったか。そうすると、サマルカンドまで一番遠い経路、即ち、ドゥシャンベ、鉄門関、グザル、カルシ経由の②をたどったとしても不思議ではない。670km の距離があるが、9/2 から 10/1 までとすれば 30 日間なので、22km/d の速度となる。非常にゆっくりしているのは、巡幸であったことを裏付ける。図 1 に経路を示したが、あくまで想像である。

4. 4 シル河の行在で講義

- O. 二十六日（十一月）行を起こした。
- P. 十二月二十三日（西暦 1223 年 1 月 26 日）雪下って気温低く、道に牛馬の凍死するものが多かった。
- Q. さらに三日にして東してホージャ・ムレンを過ぎて行在に達したが、その舟橋が夜中に壊れて舟が流れてしまったことを聞いた。事のあったのは二十八日である。
- R. 帝は震雷のことを尋ねられたので、……（真人は道を講じ、満足したチンギス・カンは太子、諸王たちに、真人の言葉を心に銘ぜよとの言葉を発する）
- S. 元旦（西暦 1223 年 2 月 2 日）将帥、医師、卜者らの書簡が来たって師に賀詞を述べた。
- T. 十一日、ついに馬首を東に向け、サマルカンドを東に去ること千余里に達し、大果樹園中に宿した。
- U. 十九日は師の誕生日である。多くの官員が香を焚いて師の寿を祝った。

- V. 二十八日、太師府提控李公が決別に來たので、師は「ふたたび会えるかどうか」と言われた。李公は「三ヶ月経てばまたお目にかかれましょう」と言ったところが、師は、「何時は天理を知らない。余は二、三カ月のうちに東に帰るであろう」と仰せられた。
- W. 二十一日、東に進む事一行程で一大河に至った。この地はサイラムを去ること東北に三行程の所である。この地には水と草が豊富で、牛馬はこれを飽食していた。よってここにしばらく淹流した。
- X. 二月七日、師は皇帝に謁し、「……三歳を経たのでふたたび故郷に帰りたい」と奏した。「朕も東行の途にあるから同行しては如何」と仰せられた。……（この間何度も先に帰りたい旨申し出るが、チンギス・カンはなかなかウンと言わない。そして、東山の麓で野猪狩猟中のチンギス・カンの落馬事故がある。真人の言により、チンギス・カンしばらく狩猟を中止する）。
- Y. （二月）二十四日、師は再び朝を辞することを請われた。
- Z. 三月七日、再び辞去を願った。……。チンギス・カン「神仙門下の者には一切賦税を免除せよ」との仰せがあり、その聖旨を認めた文書一通に玉璽を押捺されて師に賜った。

図2 シル河の行在での行動



文章の整理

日付と内容をよく見ると、明らかに文が乱れている。PはR.とS.の間に入るだろう。即ち、11/26に行を起し、3日後の28日に舟橋によりシル河（ホージャ・ムレン）を渡って行在に着いたのである。その日の夜に舟橋が壊れたのだろう。真人の誕生日は1月であるが、V.は二月のことではあり得ず、Wと入れ変わっているだろう。

想像するに、チンギス・カン一行は一カ月前にサマルカンドに着いてから少しの間郊外に駐屯していた。だが間もなく車駕で行を起し、シル河を越えて新たな行在を構えた。恐らく現在のチナズの地であろう。それを確認して真人は本格的な講話をしようとサマルカンドを発して行在に到着し、講話をしたのだろう。その後に雪で牛馬が死んだことと元旦の記事に続く。だが間もなくチンギス・カンは狩猟をしたくなり、東に向かったのだろう。そして真人も同行し正月11日に出発した。真人の講義は断続的に行われていたが、チンギス・カンが狩猟中の落馬事故でショックを受けて静養している間に本格的に行われた。そして、チンギス・カンだけでなくその子弟、高官たちの満足を得た。一段落ついたので帰国を願うが、チンギス・カンはなかなか許可せず真人を引きとめた。だがその月の終わり頃になってチンギ

ス・カンも諦めて許可したようである。

大果樹園と一大河

サマルカンドを東に去ること千余里の表現を文字通りに受け取ると、行在のあるチナズから真東方向に延ばして 120km 先のアングレン（Abgren）の町の辺りになる。だが平地は終わり山脈にさえぎられるし、さほど話題になりそうな場所でもない。W.にサイラムの東北に達したとあるので、W.の一大河とはタラス河であろう。現在のタラズとキジル・アジル（Kyzyl・Azyl）の町の平野で牛馬を飽食させたのではなかろうか。サイラムから 180km、騎馬行でちょうど 3 日行程というのも合致する。キジル・アジルの西 65km にあるテリス（Teris）地域には現在貯水池があるから、水が豊富な地域である。大果樹園があったのがテリス付近だったのではなかろうか。

東山

チンギス・カンが狩猟中に落馬した東山はどこであろうか。サイラムの東方山地は現在国立公園や自然保護区になっている。今でも動物が多いのではなかろうか。この辺りが東山であり狩りの場であろう。

まとめ

11 月の終わり頃、チンギス・カンは講話を聞くために真人一行をサマルカンドからシル河の行在に呼び寄せて話を少し聞いた。だが、軍馬を養うのと狩猟のためにタラス河までの巡遊もしたくなった。真人が行在に到着したので同行を誘い旅の途中でも話を聞こうとした。「サマルカンドを去ること千余里」も、サマルカンドに長くいた一行だから、到着して間もなくはサマルカンド基準の考え方をしたのだろう。年明けからチンギス・カンはタラス河からサイラム東方の山地で狩猟を楽しんでいた、野猪を追っている時の落馬事故があり、真人の言葉に従って猟を中断して行在に帰った。正月を過ぎてから、集まっていたチンギス・カンの息子たちや高官を交えて真人の本格的な講話が始まり、一月一杯で語り終えた。そこで、真人は 2/7 に帰還を申し出た。

距離と速度

真人一行がサマルカンドからシル河を越えた行在までの行程は 3 日の旅となっている。以前のようにグリストン経由をすると難しい日程であるから、今回はジザフとシル河間を直行したと思われる。冬の初めの雨と雪で地面に草が萌えと本文にあるから、砂漠も短期間ながら通行可能になっていただろう。雪はモンゴル馬にとって水と同じであり草もあったので、以前は無理であった直行経路も通行できたのだろう。距離は 210km だから、70km/d で 3 日の騎馬行は可能である。冬だからこそ馬の調子も良かったのだろう。

チンギス・カンと真人の考え方の違い

チンギス・カンは真人を 3 度行在に呼び寄せた。1 回目のバグラーンでは反乱が発生して親征することになり講話は中断になった。2 回目のバグラーン行は、着いて間もなく巡幸を兼ねてサマルカンドへと帰った。3 度目のシル河の行在でも、真人が到着して間もなく狩猟に出かけた。チンギス・カンはモンゴル人であり、全てのことを移動の中でやることを普通に思っていて、牛車の中でも講話は聞けると思っていたのだろう。一方真人は、哲学に関するような問題はか所に落ち着いてじっくり話さなければならず、旅の途次に話しても十分に内容が伝わらないと考えていたのに違いない。1 回目はしょうがないとしても、2 回目と 3 回目は意気込んで出かけ、じっくり講話をするつもりだったのに、相手は直ぐに移動しようとする。3 回目はとうとう同行を渋った。だが行かざるを得なくなり、T.のように、「遂に馬首を東に向けた」のだろう。イヤイヤの気持ちが、「遂に」に表れているのではなかろうか。

双方の生活習慣からくる食い違いを感じて、真人がため息を漏らしているようなのが、文の微妙なニュアンスから窺える。チンギス・カンが狩猟中の落馬でショックを受けて静養していた年明けに、集中的な講話を行ったのだろう。このように考えると李公との会話は、近いうちに講話を終わらせて必ず帰路に着く、と真人が心に固く決めたからではなかったか。そのように言うには差しさわりがあるので、天理を持ちだしているのだろう。李志常もその辺の経緯は書かなかったので、この個所の文意が分かりにくくなっていると思われる。

4. 5 まとめ

- ①二度目の行在行きも、以前と同じアム河の南にあったバグラーン付近である。
- ②サマルカンドからアム河に至る経路の日付には明らかに誤りがある。8/8 サマルカンド出立、8/10 大山入り、8/15 ケリフ着、8/22 行在着としなければならない。
- ③ケシュ南から大山に入り、アム河渡し場に出る経路を推測したが不明点が多い。
水の赤い川とか塩の山とかは、ルートも含めて現地確認しないと確かなことは言えない。
- ④シル河の行在はチナズ付近にあったと思われる。
- ⑤真人とチンギス・カンの通訳には、劉仲録や阿里鮮、更には鎮海もいたはずだが、わざわざサマルカンドから阿海を呼び寄せている。恐らく、哲学的な通訳は他の三人には無理だったのだろう。阿海は正統で高度な漢語の教育を受けており、なおかつ、当時哲学的な用語に乏しかったと思われる蒙古語で訳すことのできる知性と語学力を備えた人物であったと思われる。

4 章了

第5章 帰国

5. 1 帰国の途に着く

- A. チンギス皇帝は阿里鮮を宣差に任じ、蒙古帯、喝刺、八海を副使として師の東帰還を護衛せしめた。三月十日、いよいよ朝を辞して行を起こした。タラカン以下はみな葡萄酒、珍しい果実などを携えて数十里の道を送って来て一同泣いて別れた。
- B. 三日目にサイラム大城の東南に達した。この辺の山で長さ二尺ばかりの両頭の蛇を見たが、土地の者はしばしばこのような蛇を見かけると言っていた。
- C. 十五日門人たちは共に郊外に出て、先にこの地に葬った虚静先生趙公の墓を弔った。
- D. 翌日この地を出発した。
- E. また十日でアルマリック城の西百余里の地に達し、大河（イリ河）を渡り、四月五日アルマリック城の東園に至って宿した。

サイラム到着

真人一行はチンギス・カンの手による全真教保護の書面を手にして帰国の途についた。出発地はシル河の行在であろう。サイラムに直行でなくその東南に達している。距離 180km を 3 日なので騎馬によるものである。B. で言う山はサイラムの東南 30km から始まる山岳地帯のことだろう。わざわざそこに立ち寄った理由は何であろうか。前年末のチンギス・カンの狩猟がこの辺りで行われていたとすれば、真人はそこで何か有用な物を見つけたのかもしれない。両頭の蛇そのものか、貴重な薬草などを入手するためであろうか。

二つのアルマリック城

初めのアルマリック城は現在のアルマトゥイであろう。この名前はモンゴル征西の前から使われていた由来の古い名前とのこと。往路にあった「山北の小城」のことである。アルマリック城と同じく、アルマ即ちリングという名前が付いているので、聞き誤ったか書き誤ったのだろう。サイラムから城まで 660km なので、その西百里は 600km 地点のウジナガシュあたりになる。そこまで 10 日であるから 60km/d の速度であり、騎馬として妥当である。次いで渡った河は来た時と同じイリ河である。

日程

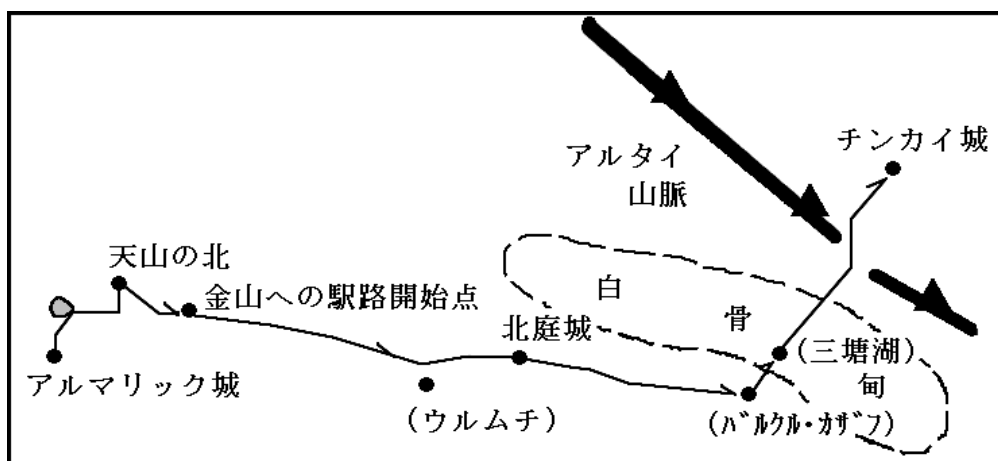
3/16 にサイラムを出発しアルマトゥイの西まで 10 日なので、そこに到着したのは 3/25 である。アルマトゥイ西を 60km 手前のウジナガシュとすると、そこから往路と同じ道をたどってアルマリック城まで 510km ある。60km/d の速度で 8.5 日である。これにイリ河渡河の 1 日を加えると、4/5 アルマリック城到着の計算になり記述に合う。前回のイリ河、アルマリック城間の行程は 90km/d を越えていたが、今回は 60km/d の速度で進んでいる。虚静先生の死後以降速度を落としているのもあるが、春先で馬が痩せていることもあるかも知れない。

5. 2 チンカイ城まで

- F. おそくなって天山の前面に至って宿した。

- G. また翌日、ふたたび四十八橋を渡り、溪谷上を五十里進んで天地に達し、東北に進んで天山の後ろを過ぎた。行くこと二日で、往路に経たアルタイ山の南側の大川に沿う駅路に接した。
- H. ふたたびアルタイ山の東南を過ぎ、北の山に沿うて進んだ。
- I. 四月二十八日大雨雪があった。その翌日には全山ことごとく白雪に覆われていた。
- K. また山道を東北に向かい、三日で阿不罕山の前に着いた。往行の時、そこに止めておいた門人宋道安ら九人の者ならびに長春玉華会の一同の衆および宣差郭徳全らは遠く出迎え、共に栖霞観にはいった。

図1 アルマリク城からチンカイ城



経路の概観

アルマリク城からチンカイ城までの記述は非常に簡単である。ベシュバリク城は往路で大歓迎を受けたのだから、帰路でも大いに慰労されたとして不思議はないが、他の城も含めて立ち寄ったとの話は一切出てこない。早く仲間のいるチンカイ城に着きたくて帰路を急いだのだろう。

天山の前面

これは、これから山上がりになって四十八橋を越える直前の平地であろう。アルマリク城から 52km であるので、一日で余裕がある。だが本文には、出発前に講演をしてもらおうと引き止める漢人の工匠との悶着や、真人の乗馬が逃げ出したとかの騒動が書かれているので、それらに時間を食われて遅く着いたのだろう。到着は 4/6 であろう。

天地と天山の後ろ

これは、来た時に経たサイリム湖と現在のボルタラモンゴル自治州である。天地（サイラム湖）着が 4/7、ボルタラ着が 4/8 となる。

アルタイ山の南大河駅路

ボルタラから二日かけて、前回難行した砂漠の東の取り付き地点、N44.55,E83.5 に到着したと言っているのだろう。前回とは季節が違い、地面がまだ固かったので楽に越えられたのではなかろうか。そこから草原の道が始まり、往路にアルタイ山脈を越えた所に流れていた川に繋がる。やっと自分たちの仲間が待っている所に帰ることができるという安心感から書かれた文と解釈できる。ボルタラから 130km ほどであるので、60km/d ほどの速度で駆ければ達しうる。

アルタイ山近くの進路

往路と同じ道で帰ったとすれば、チンカイ城直前では、東へ進むとなければならないが、H.と K.で2回出てくるのは東北である。実際アルタイ山からチンカイ城へ東北に向かう道があるので、これを帰路としたのに違いない。

チンカイ城までの経路

帰心のはやる一行は、どこにも長居せず、草原の道をひたすら駆けたように思われる。チンカイがない今回は白骨甸の真ん中を抜けるのを避けて、現代の道路表示がある大道を通ったのではなかろうか。この経路は水場が少なそうだが、春先なので雪解け水等が利用できる場所があったのだろう。アルタイ山脈を抜けてチンカイ城に向かう道は、表示は薄いが地図上にはっきりとある。

日程と距離

天山の北を出たのが4/9なので、駅路開始点に4/10着となる。4/11出発で5/1チンカイ城到着とすると21日かかっている。北庭城経由の草原の路を取ったとすると距離は1,200kmあるので57km/dとなる。アルマトゥイまでの速度とほぼ同じであるから、どこにも滞留せずに進んだとの考えは合っていたようである。バグラーンの行在に行くにしても、同じ道は通らない傾向からして、この経路もそのように考えられる。もしも、ウルムチ、和州を回ると距離は1300kmなので、62km/dとなる。微妙な差だが、この経路ではないように思う。

5. 3 チンカイ城での滞在

一行は数日滞在して英気を養う。残された者たちとの話も尽きなかった。この地方の地理や風俗についても色々書かれている。虚静先生が亡くなったとの手紙が来る前の日に、先生のことを夢に見たとの話も語られる。帰路をどうするかについて議論され、真人一行は往路と同じ経路を避けて早く帰還できるハンガイ山脈の南を通る方を選んだ。ただ道中に草と水が乏しいゴビ地帯であるので、三班に別れ数日間隔で順次出て行くことになった。

5. 4 タングット人の国の北辺まで

- L. 五月七日、宋道安ら六人の第一班を先行させた。
- M. 十四日、師はみずから尹子平以下の六人を伴って二番目に出発した。夾谷妃、郭宣差、李万戸ら数十人は二十里の間師を送り、馬を下りて再拝し、泣いて決別した。
- N. 十八日には張志素、李志常ら五人の第三班が出発した。
- O. 師は東行されて十六日には大山を過ぎたが、その山上には雪があり、はなはだ寒かった。払廬で騎馬を換えた。
- P. 十七日、師は食をとられず、ただときどき汁を飲まれた。東南して大砂漠を過ぎたが、そこには草木もあり、草木の間には蚊や虻が多かった。夜は川の東に宿した。
- Q. また数日の間、師は時に車に乗られた。(…体調を心配する弟子と、心配するなという真人の会話あり)
- R. さらに砂地の道を進む事三百里、水と草極めて少なく、夜は休まずに馬を進めた。かくて二泊した後に砂地を出た。その地はタングット人の国の北辺の地であった。ようやく天幕の数も多くなり馬も得やすく、遅れて出発した一行も師に追いついた。

図2 チンカイ城出発



大山

一行はチンカイ城から東に向かったとある。その通り、出発時は東だが間もなくやや南に振れている道がある。そして3日目に雪を被った大山の麓を過ぎている。これに適う大山は、ギチゲニー山脈(Gichgeniy Nuruu)であろう。GMapでは名の分からない東の峰3,769m、45.37N97.18Eに多く雪が残る。しかしこの季節では、主峰である西のブルハン・ブーダイ山(Burhan Buuday uul) 3,765mにも雪が多く残っていただろう。地図上の今の道をたどるとチンカイ城から210kmほどだが、70km/dとなって少し早すぎる。大回りしている事にもなるので、交通痕の見える近道を通っただろう。そうすると東峰を過ぎるまで180kmなので、60km/dの速度となりちょうど良い。東峰の東北地点に道が集まっている所があるので、その辺りに払盧(テント)があったのではなかろうか。

300里の砂地を越えるまで

大山を越えた所から60km地点、チャンドマニという部落の少し東に、道路に沿って流れている川がある。P.に言う蚊と虻の多い川であろう。45.37N98.16E地点である。ここから道形に進みバヤンブラグ(Bayanbulag)、45.01N98.93Eを過ぎたであろう。この辺から真人は時おり牛車に乗りながら進む。一日平均速度を出すのは難しいが、牛車の平均速度28km/dと騎馬の60km/dの間をとって50km/dとして計算し、数日とある日数を4~6日とすると、200kmから300kmの進行距離になる。この距離で到着した地点から更に170里で砂地を越えるのだから、越える直前に到着した地点は、ある程度の水草が得られて牛馬の力が蓄えられる地点であっただろう。このように考えてGMapを見て行くと、ハタンスウーダルの集落があった。44.55N100.83E地点である。地図を見ても小規模だが水と草地があり、17日に宿泊した河の側から260kmの距離になって推定の範囲内である。

タングット人の国の北辺

タングット人の国の北辺とは、中国で言う亦集乃(エチナ)路の北に出たと言うことだろう。有名なカラ・ホト、漢語で黒水城は西夏の重要都市であり、現在は額濟納(エチナ)旗という町である。その北方の、現在はモンゴルとなっている辺りも当時はタングット人の住む一帯だったのだろう。そこからどのような経路で漢土に向かったのか全く書かれていないが、明瞭な終着点の一つは中国の大同なので、モンゴルの南部を東に進んだのだろう。モンゴル内の経由地として、現在のダランザドガドは外せないだろう。カラ・ホト方面から漢土に帰ることは、距離的に考えられない。

三百里の砂地を越えた地点

中国との国境の真北方向に三つの候補地がある。グルバンテス (Gurvantes)、ノヨン (Noyon)、セブレイ (sevrei) である。三百里即ち 170km 程の距離を考えると、ノヨンは少し遠すぎ、グルバンテスかセブレイになるが、少し前の地図にはグルバンテスの名がないし、集落の規模も小さすぎる。ダランザドガドに向かうにも遠い。それを考えると、セブレイ、43.59N102.19E の可能性が高いように思う。モンゴルの勢力下に入る前には、この辺りは実際に西夏の領土であり、当時もタンгут人が住んでいたのだろう。セブレイの北方は赤みを帯びた砂地が続いているので、経路の表現もこの区間に合っているように思われる。この経路を GMap で見ると、現在の街道を外れたところにもいくつかの通行痕を見るが、とぎれとぎれである。少し前の地図にも何本か線が引かれているが、路は季節的にも選ばれるものであるから、具体的な経路は判断できない。

5. 5 宣徳に帰還す

- S. 六月二十一日、漁陽関に宿した。
- T. 翌日関を東に五十余里を過ぎて豊州に至り、その地の元帥以下の来迎を受けた。
- U. 七月一日 (西暦 1223 年 7 月 30 日)、また行を起こして三日には下水に至った。元帥夾谷公は城を出て出迎えた。
- V. 翌日 (七夕の翌日) 出発した。この月の九日、雲中に至った。…ここに二十日間滞在した。
- W. 八月の初め東に向かい楊河に行き、白登、天城、懷安を経て渾河を渡り、十二日には宣徳に到着した。

漁陽関と豊州

モンゴル南部を進む行程の描写はない。風景が単調だったのか、あるいは夏のゴビ地帯をほとんど夜間に進んだので、記録の欠落になっているのであろうか。いきなり漁陽関に飛び、そこから五十里で豊州である。この地は中国サイトでも呼和浩特 (フフホト) 市近くとされてはいるが特定されていない。漁陽関の名はネットで探せない。漁洋関はあるが湖北省であり、漁陽なら天津や北京の近くにあった県である。関の場所はフフホトの北方であろうが、その近辺で関がありそうな地形は、図 3 に示す通り三つある。①は東に進むと山に入るのでここではなさそうである。②から東に小黒河を越えて真っ直ぐに進んだ 30km の地点 a は市の郊外であるが、大きな道路の分岐点になっている。交通の要衝と言えるので、その辺りに豊州があったとしてもおかしくない。小黒河を渡らずに、川に沿って南に 50 里、即ち 25km ほど進んでから川を渡るとフフホトの玉泉区がある。小黒河の南岸、大黒河の北岸になる。大黒河を南に渡ると匈奴に嫁いだ王昭君の墓がある。この墓の信ぴょう性は分からないが、由緒ありそうな地域に思える。「中華人民共和国地名大詞典」には、b の玉泉区が呼和浩特故城であると書かれているので、ここが豊州であろう。③は、山からの出口に紅領巾水庫というダムがある。水が豊富そうなので漁が行われていたとしてもおかしくはなく、真南に向いているので漁陽関と言えそうな地形である。そこから真っ直ぐ東に向かえば玉泉区に 30km であり、方向と五十余里の距離が一致する。ただし、北方は山岳地帯で塞がれており現在も大きな道路標示がないので北方からやって来たとは思えない。西の包頭方面から達したと推定する。

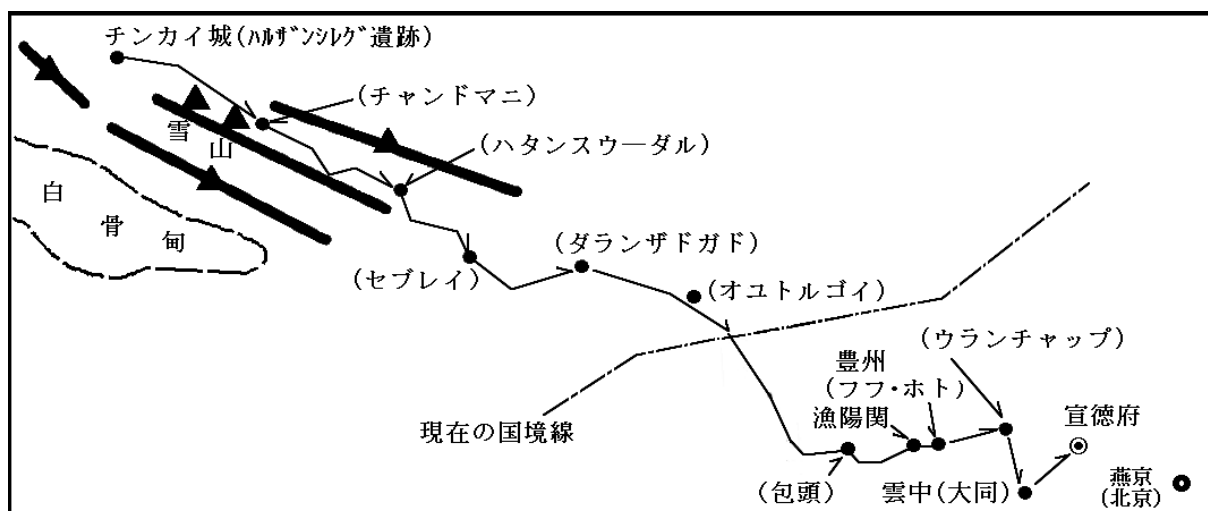
図3 漁陽関と豊州



速度と行程

チンカイ城を三班に分かれて出ている。最も遅い李志常たちの出発日が 5/18 である。6/22 に豊州着なので、35 日間の旅であった。チンカイ城から豊州までおよそ 1,700km あるので、49km/d となる。真人の班は 4 日早く出ているので、平均速度は 55km/d となる。セブレイ辺りまで真人は時おり牛車に乗っていたので少し速度が落ちた様子であるが、その後は順調だったようである。セブレイを出た後、ダランザドガド、オユ・トルゴイ付近を経てから、内モンゴルの烏梁素湖の西に向かったのだろう。現在のこの道筋を見ても、20 数 km 間隔で小さな集落がつながっており、昔からの宿駅のように思える。牛車の場合是一日に一駅、騎馬の場合は二駅進んだのであろうか。

図4 チンカイ城から宣徳府までの経路まとめ



豊州から宣徳府

次に立ち寄ったのは下水という妙な地名で、中国資料で探せなかった。原注には大同から来た夾谷公が歓迎したとある。次の雲中は正に大同であり宣差総管が出迎えている。下水は大同管理下の小さい町のように思えるが、ここでも数日滞在しているほどだから、それほど

小さい町ではない。雲中が現在の大同市であるのは動かせないから、下水を比定すれば現在の烏蘭察布（ウランチャップ）である。フフホトから 145km であり、7/1 から 7/3 までの 3 日で至ったことに合っている。大同に向かう他の経路の途中には大きな町がないのでここしかない。次の大同へは 7/8 に出発し翌日 7/9 に到着している。距離はウランチャップから 102km なので問題がない。ここまでの行程は騎馬行である。

雲中から宣徳府への途中にある白登は、現在の大同市陽高県で市の北東にある。そのまた東の天鎮県が天城である。懷安は今も張家口市の懷安県に名を留めている。大同から宣徳府まで 210km ある。8/1 に出発し 8/12 に到着の 12 日間だから、18km/d の速度となる。牛車行であろうが、それにしても遅いのは、各地で 1 日ずつほど引き止められたのだろう。豊州から宣徳まで 350km ほどの行程は、各地の長官から凱旋將軍のような歓迎を受け、真人の元に信者が押し寄せる姿が描かれている。

帰路の行程

1223 年 3 月 10 日にシル河を出て、1223 年の 8 月 12 日に帰って来た。帰路は 5 か月の旅であり、往路に 1 年 2 カ月かかっていることを思うと半分以下である。乗馬にすっかり慣れたことが大きいのだろう。

5. 6 まとめ

- ① 帰路は往路と異なった経路、即ち北庭故城を経る帯のように伸びる草原を通り、シャルガ盆地の南西に出てチンカイ城に着いたと考えられる。1223 年 3 月 10 日にシル河を出て、1223 年の 8 月 12 日帰着の 5 か月の旅であった。
- ② タングット人の土地の北辺というのは、エチナ路の北への延長上にある現在のセブレイであろう。当時は文字通りタングット人の土地であったのだろう。
- ③ セブレイから豊州まで記録がないのは、ゴビの単調な景色もあるが、水場の問題と暑熱を避けるために夜間行進していたことも考えられる。
- ④ 漁陽関については確信がない。良い情報があれば改めたい。
- ⑤ 帰路の大部分は騎馬行であり、速度 50～60km/d を保っていた。行路では 90km/d を越す区間もあったが、高齢の真人を含む漢人一行には、その速度の持続は無理だと判断されたのだろう。
- ⑥ 1221 年の陰暦 2 月 8 日に行を起こし、1223 年の 8 月 12 日に帰って来た。二年半の旅であった。出立時、「三年で帰る」と信者たちに行っていた約束が果たされた。

第 5 章了

終章

グーグルマップを用いて西遊記の旅程を追跡した。地点特定と距離測定機能は大いに威力を発揮し、不明だった経路を推定することができた。西遊記の記述はおおむね正確であったが、一部記述が前後している点や日数や距離が誤りではないかと思われる点もあった。また、千余里や万余里の言葉は額面通り受け取れない場合がいくつかあった。難解であった白骨甸の位置は間違いないと思うが、そこでナイマンの敗兵が多く倒れたと言う事は、彼らがどこからそこに至ったかと言う新たな問題を投げかけるものである。

チンギス・カンと真人が会談した地点がバグラーンと判明したのは、衛星写真で鉄門付近の地形を確認でき、グザルが鉄門関と呼ばれていたとの推定ができたおかげであった。ケルレン河変曲点で一行が立ち寄った場所、長松嶺の後ろに西や金山の東北の地点など、不明であった通過点も旅の速度から推定して見出す事が出来た。驚くべき事は、現在は大きな街道が通っていない場所や、現在使われているとは思えない場所に、明瞭でかつ激しい通行痕が何箇所も見られた事であった。魚児渚の周辺、東ウジュムチンからタムサブラクを経てハルフ・ゴルに至る道などである。考古学的に何時の時代のものか判別できるのであろうか。

この研究で西遊記の不明点の多くを解明できたものと信じるが、あくまで地図上の理解に過ぎず、現地で調査して確認しなければならないことが多くある。

- ①蓋里泊から魚児渚に至る道の確認
- ②東ウジュムチンからタムサブラク方面に伸びる激しい通行痕の実態
- ③ケルレン河屈曲点の遺跡の性質
- ④トール河渡河点とカラ・トンからそこに至る経路の実態
- ⑤長松嶺の後ろと西の位置の妥当性
- ⑥トソンツェンゲル付近にオールドが存在した痕跡
- ⑦そこからウリヤスタイに至る行程の地理環境
- ⑧ヤルーギ河付近の故城の性格
- ⑨チンカイ城からアルタイ山脈を越える道の確認
- ⑩二座の赤い山から白骨甸を経て三塘湖に至る道の確認
- ⑪ベシュバリク城はウルムチであるとの確認。
- ⑫輪台とジャンバリク城は同一地であるとの確認
- ⑬アルマリク城の位置の確認
- ⑭アルマトゥイから大石林牙に至る道の確認
- ⑮グザルが鉄門関であるとの確認
- ⑯アム河を渡ってバグラーンに至る道の確認
- ⑰バグラーンでの当時のモンゴル遺物、遺跡などの調査
- ⑱その他

筆者は門外漢なので専門家に調査して頂ければ幸いである。

それにしても、七十歳を越えた十三世紀の老人が、牛車と馬に乗り、野外で宿泊する毎日をほぼ二年続けての旅であった。その中には現代の人間でもたじろぐ経路がいくつかある。同じコースを同じ乗り物で進めと言われれば躊躇するだろう。いくらチンギス・カンが漢土や他国の有名人を招聘しても来なかったはずである。その中を不慣れな乗馬を練習して、時

には夜行し、時には一日 90km の速度で駆けて、三年にも及ぶ旅を完遂した長春真人は正に超人と言える。帰国してから四年後に八十歳で亡くなった。腸を患っていたようなのは、長期間の乗馬をしていた振動の為かも知れない。弟子の趙九古がなくなった後、乗馬での移動速度が 60km/d に落ちているのを見ても、趙九古の死因も乗馬による腸疾患に因るのではなかろうか。

同行した弟子の尹子平、西遊記を記述した李志常とも真人亡きあと教団を引く継ぐ指導者になった。そして、全真教は現代中国にも存続している。命を賭けた真人の努力は実ったと言えよう。

本ノートがモンゴルから西域方面の中世の交通路の実態を読み解く鍵になれば幸いである。

終章了

資料

参考にした資料を以下に記す。特に白石先生の著作には多くを負っている他、魚児灤の情報も頂いた。その他では、ネットの中国サイトの情報を大いに参考にしたが、アドレスは記さなかった。

史料

『長春真人西遊記』李志常：(1966) 台湾中華書局発行
(十六国春秋、華陽国志、長春真人西遊記) 合本版

参考文献

- (1)岩村忍訳 (1961)「長春真人西遊記」322 頁
『世界ノンフィクション全集 19』収載、筑摩書房
- (2)白石典之編 (2015)「チンギス・カンとその時代」勉誠出版
- (3)Arthur Waley (1931)「The travels of an alchemist」Haedley Brothers,London
南天書局 (台湾) 再版本
- (4)白石典之(2012)『「魚児灤」再考』日本モンゴル学会紀要第 42 号
- (5)関口精一(1988)「改訂再版シルクロード詳図 蘭州からアラル海まで」八雲書店
- (6)白石典之著 (2001)「チンギス・カンの考古学」同成社
- (7)白石典之著 (2017)「モンゴル帝国誕生」講談社
- (8)杉山二郎訳注(2002)「長春真人西遊記」国際仏教学大学院大学
- (9)千田嘉浩(2009)「契丹城閣の比較研究」『中世東アジアの周辺世界』コラム 11、同成社

改訂履歴

2017年12月5日初稿作成

2018年5月30日第2改訂

初稿と大きく変わらないが、写真を加えた他言葉使いを部分的に改めた。終章における漁陽関と豊州の位置の考察は書き変えた。

2019年10月16日第3改訂

白骨甸の図を入れ替え、最終行程の考察を書き変えた。

以上